

# 薩摩藩と近世琉球国の人口

―琉球人口データ及び近世前期の薩摩藩の社会動向に関する  
新たな史実を付加しての「薩摩藩の人口」補論―

尾口 義男

(本館調査史料室長)

はじめに

筆者は、先に近世の薩摩藩領の人口推移や国(薩摩・大隅・日向諸県郡)・島嶼(奄美・琉球)別の人口動態に関心をもって史料を収集して調査・考察を進め、その結果を「薩摩藩の人口」(黎明館調査研究報告11)、一九九八年)として報告したことがある。

その後、十七世紀後期の薩摩藩の薩摩・大隅・日向諸県郡三か地域の人口(三州人口)と主な身分別人口を知ることのできる新たな史料の存在を教えられ、先の報告や考察に若干の補足を行える機会を得た。

また前掲報告では、江戸時代に日中両国に服属して薩摩藩の支配下にあった琉球国の人口についてもいくつかのデータを提示して、その動態について若干触れ、薩摩藩の三州本領域部と琉球国・道之島の男女別人口を対比してみた場合の極めて対照的な特徴に言及している。

さて、この琉球国人口についてであるが、近世を通じての同国人口の規模や動きについては意外と知られていないという。特に近世前半期についてはほとんど不明のまま研究が据え置かれてきているとも聞く。

ところで、先の報告では、当時の筆者の問題関心が主に薩・隅・日の薩摩藩本領域部と奄美地域の人口の規模、及びその動態の把握にあった

ことに加えて、時間的制約の中での中間報告という発表の事情も重なり、近世の琉球国人口については史料調査がいささか不満足なままに終わっていた。

黎明館では、近い将来に「薩藩例規雑集」(東京大学史料編纂所蔵「島津家文書」)を「鹿児島県史料」として編纂・刊行する計画があり準備を進めている。そのための目録作成や史料内容点検作業中に、筆者は近世前半期の二期の琉球国人口を知ることのできる史料を見出した。本稿では、先ず最近見出した琉球国人口に関する史料を紹介し、これに他の薩摩藩や琉球側作成の史料を補って、先の報告で充分を尽くすことのできなかつた近世から近代初頭に至る間のそれぞれの時期における同国人口の規模を明らかにし、その動態の特徴について指摘したい。

そして次には、前掲論文発表後に筆者が新たに得た十七世紀後期の薩摩藩三州本領域の人口に関わる史料を紹介した後、第三番目として、この新たなデータを前稿に付加して同地域において第一期の人口の爆発的な急増現象の発生した時期について考えてみたい。

第四番目には、これらの事実確認を踏まえて、これまで筆者が発表している薩摩藩の人口関係二論文の報告に追加と補足を行い、改めてまとめ直して薩摩藩の人口動態の特徴を指摘したい(前稿及び本稿の中で「薩摩藩」は、薩摩国・大隅国・日向国諸県郡の三州本領域部に道之島・琉球国

を含めた広義の意で用いている。また薩摩藩の総人口と表記する場合、その意は前記五か地域の人口を合計した全体人口を示している。

第五番目には、薩摩藩の人口動態のもつさまざまな特徴のうち二つを選び、その具体的背景、すなわち背後に潜む知られざる薩摩藩の歴史事実を明らかにしたい。

以上の考察を踏まえて、最後に、今後の薩摩藩史研究を進めるうえで、深く留意しておかなければならない人口動態からみた問題点について指摘したのち、前稿での考察不足やデータ提示上の不備等について若干の補正を行いたい。

## 一 近世の琉球国の人口について

### 1 近世前半期の琉球国人口

現在、黎明館調査史料室では薩摩藩の藩政全般に関わる基本的な法制・社会・経済史料集の一つである「薩藩例規雑集」を『鹿児島県史料』として刊行するための準備にとりかかっている。この最終巻の「薩藩例規雑集 卷廿五」には、琉球国関係の薩摩藩支配に関わる諸法令ほか多くの統計資料が収められていて、その一つに琉球国人口の規模や推移を知ることのできる「琉球国人口概数」という見出しの史料がある。

以下、この史料ほかいくつかの史料に基づいて、寛永年間から享保年間に至る近世前半期の一六期における琉球国の人口をみてみたい。

a 「薩藩例規雑集」にみる十七世紀〜十八世初めの人口  
「薩藩例規雑集二五」に収める「琉球国人口概数」の人口関係記事全文を掲げる。

一 同九年壬申初而琉球国頭数改有之、

但万曆三拾七年己酉（慶長十四己酉）琉球人ヨリ二十九<sup>（マ）</sup>年目

二 当ル、

一 頭高拾万八千九百五拾八人

内 男五万三千六百拾人

女五万五千三百四拾八人

寛永十三丙子、崇禎九年

一 同拾壹万千六百六拾九人

内 男五万四千四百九拾六人

女五万七千七百七拾三人

寛文五乙巳、康熙四年

一 同拾壹万貳百四拾壹人

内 男五万四千百八拾八人

女五万六千五百拾三人

万治二己亥、順治十五年

一 同拾壹万貳千七百六拾四人

内 男五万五千七百貳拾壹人

女五万七千四拾三人

寛文十二壬子、康熙十一年

一 同拾壹万六千四百八拾三人

内 男五万七千五百四拾八人

女五万八千九百四拾三人

延宝五丁巳、康熙十六年

一 同拾貳万貳千貳百拾三人

内 男六万五百五拾八人

女六万六千六百五拾五人

貞享元甲子、康熙二十三年

一 同拾貳万九千九百九拾五人

内 男六万四千貳百三拾五人

女六万五千七百六拾八人

元禄三庚午、康熙二十九年

一 同拾貳万八千五百六拾七人

内 男六万三千四百三拾八人

女六万五千百三拾七人

元禄十二戊亥、康熙三十七年

一 同拾四万千八百八拾七人

内 男六万九千九百九拾五人

女七万九千九百九拾貳人

宝永四丙戌、康熙四十五年

一 同拾五万五千貳百六拾壹人

正徳三癸巳、康熙五十二年

一 同拾五万七千七百六拾八人

享保六辛丑、康熙六拾年

一 同拾六万七千六百七拾壹人

内 男八万 九人

女八万七千六百六拾貳人

この「琉球国人口概数」の冒頭の記事によれば、琉球国では寛永九年（一六三二）に初めて人口調査が実施されたとする。そして、この寛永九年の最初の人口調査によるデータを初出として、これには享保六年（一七二一）に至る近世前半期の約九〇年間の一二二期における琉球国総人口が留められていて、うち一〇期については男女の内訳人口まで知ることができる。

これによれば、琉球国人口は江戸時代初めの寛永九年（一六三二）に一〇万八千九百八十八人（男五万三千六一〇人・女五万五千三百八十八人）と一〇万人台後半にあったが、直後には一万人台に達して寛永十三年（一六三六）一十一万一千六百九十九人（男五万四千九百六十六人・女五万七千七百三十三人）となり、以後、万治二年（一六五九）一十二万二千七百六十四人（男五万五千七百二十一人・女五万七千四百三十三人）、寛文五年（一六六五）一十一万二千四百一十一人（男五万四千八百八十八人・女五万六千五百三十三人）と、十七世紀中期にかけては停滞的に推移している。その後、同世紀後半期半ば頃から漸増傾向に転じ、寛文十二年（一六七二）一十一万六千四百八十三人（男五万七千五百四十四人・女五万八千九百三十九人）だった人口は、まもなく一十二万人台を突破し、以後少しずつ増えて延宝五年（一六七七）一十二万二千三百一十三人（男六万五千五百八十八人・女六万六千五百五十五人）となり、貞享元年（一六八四）一十二万九千九百九十五人（男六万四千三百三十五人・女六万五千七百六十八人）、元禄三年（一六九〇）一十二万八千五百六十七人（男六万三千四百三十三人・女六万五千一百三十四人）となつていく。それが十七世紀末になると琉球国人口は急増状態に入り、元禄中・後期に一十三万人

台、次いで一四万人台を突破して、元禄十二年（一六九九）には一四万  
 一一八七人（男六万九一九五人・女七万一九九二人）となり、その後宝  
 永四年（一七〇七）一五万五二六一人、正徳三年（一七一三）一五万七  
 七六〇人、享保六年（一七二二）一六万七六七一人（男八万〇〇〇九人・  
 女八万七六六二人）と、十八世紀の前期にかけて急激な勢いで増え続け  
 ていつている。

b 「阿多家諸書留」にみる十七世紀半ばの人口

江戸時代の大隅国志布志郷で郷士年寄（嘸）家として同郷の最高行政  
 に代々あづかった家に阿多家があつた。その直系の子孫家に、戦国末か  
 ら十七世紀後期に至る間の南九州や薩摩藩で起こつた大きな出来事に関  
 する古記録やそれらの時期の薩摩藩政にあづかつた歴代家老の記録、及  
 び藩政に関わる各種の統計資料や記事を収めた「阿多家諸書留」という  
 記録が伝えられている。著作の時期は十七世紀末から下つても十八世紀  
 初めの頃と推測される。この史料本文の前後に、寛文五年（一六六五）  
 頃か、その直近の寛文年間（一六六〇～一六七〇年前後）のものゝ推測  
 される薩摩藩人口関係記事が収められている（『黎明館調査研究報告11』）。

前掲論文でも紹介したが、現段階では、この人口データは薩摩藩領域  
 の総人口（含む、琉球国人口）を国・島嶼別の内訳とともに史料でもつ  
 て把握できる最古のものであり、しかも当時の奄美諸島（道之島）につ  
 いては全人口のほか個々の島の内訳まで留めてある貴重なものである。  
 しかしながら一般にはほとんど知られていない。再掲する。

一 都合男女三十五万四千三百式拾七人

内	拾七万八千百壹人	薩摩
	拾一万五千四百五拾九人	大隅
	六万七千六百六十七人	日向国之内 諸県郡
一	都合男女拾四万五千五百八拾八人	
内	拾壹万式百拾壹人	本琉球
	三万三千三百七拾七人	道之島
内		
	壹万三千三百卅式人	大島
	四千八百式拾壹人	喜界島
	七千六百六拾四人	徳之島
	四千五百九拾五人	永良部島
	九百六拾五人	与論島

この「阿多家諸書留」によれば、寛文五年（一六六五）に近接した寛  
 文年間の琉球国人口は二二万〇二一人であった。

c 「薩摩幕府諸国巡見使応答案」にみる十七世紀末の人口

東京大学史料編纂所の「島津家文書」中に（貞享元年）薩摩幕府諸  
 国巡見使応答案」という史料がある。この史料本文の末尾に、貞享元年  
 （一六八四）に薩摩藩が実施した宗門手札改の調査に基づいて得られた  
 鹿児島城下はじめ薩摩国・大隅国・日向国諸県郡の三州分、及び琉球国  
 の人口記事が収められている（道之島の人口記事は欠落）。

これによれば、十七世紀後期の貞享元年（一六八四）の琉球国人口は  
 一二万九千九百九十五人、その内訳は官人士身分の男三八一〇人・女（妻子）

三九三八人、及びそれ以外の身分の者の男女合計人口一〇万二三四七人となっている（後者の一〇万二三四七人は二万二三四七人の誤写か）。

参考までに、この史料に留める琉球国人口は「薩藩例規雜集二五」に同年のものとして掲げる数値二万九九九五人と完全に一致している。

#### d 「列朝制度」にみる十八世紀初頭の人口

薩摩藩史の研究を進めるうえで最も基本的で重要な史料集の一つに「列朝制度」（都城島津家所蔵、『藩法集』8 鹿兒島藩【上・下】）という法制・社会・経済史料集がある。この「卷之六」に、宝永六年（一七〇六）に薩摩藩が実施した宗門手札改の調査に基づいて作った人口統計が収められていて、国・島嶼別単位で男女別・身分別の人口を把握できる。

これによれば、十八世紀初め宝永六年の琉球国人口は一五万五一〇八人（男七万六〇二六人・女七万九〇八二人）、その主な身分別の人口内訳は官人士身分男女合計一万四〇一四人、出家身分男一七五人、官人下人・家来身分（寺社家・寺下人迄）男女一万三三四人、在郷身分男女一二万七七八〇人、入墨流人（日本人）男五人となっている。

#### e 『沖繩市史』等にみる十八世紀前期の人口

次に『沖繩市史 第二編 史料編1』によれば、これから二十年余が経った享保十四年（一七二九、雍正七年）に実施された薩摩藩宗門手札改の人口調査結果を留めた史料があり、その中に当時の琉球国人口が一七万人を超えていたことを示す記事があることを記す。田名真之の『近世沖繩の素顔』はその数量を一七万三九六九人と掲げている。

## 2 近世後半期の琉球国人口

十八世紀半ば以降幕末維新期に至る時期の琉球国人口を示す史料には、古くからいろいろな存在が知られている。以下、六期の人口を年代順に列挙して示す。

#### a 「独物語」にみる十八世紀半ば、寛延年間頃の人口

十八世紀前・中期に琉球王国の三司官として国政を長期にわたって指導した秀れた政治家に蔡温（一六八二生、一七六一没）がいる。彼が一七五〇年（寛延三・尚敬三八）に著した「独物語」（『蔡温選集』）によると、その頃（十八世紀半ば）琉球国人口は約二〇万人位に達していたことが察せられる。

#### b 「琉球館文書」にみる十八世紀半ば、宝暦期の人口

かつて鹿兒島にあった琉球館が薩摩藩庁との間で行ったさまざまな交渉の過程で作った応答文書類や提出した報告・願書類等の控を集め写した文書が「琉球館文書」（一七五一一八一三年の文書二一五通、『那覇市史 資料編第1巻の2』）として琉球大学附属図書館に所蔵される。その中の明和五年九月二十五日付の薩摩藩庁宛琉球館届書によれば、宝暦十一年（一七六一）の薩摩藩宗門手札改にあわせて実施された人口調査の結果として琉球国人口一八万八五三〇人が掲げられている。

#### c 「要用集抄」にみる十八世紀後期、明和期の人口

『鹿兒島県史 第二巻』には「要用集抄」に収められていた十八世紀後期の明和九年（一七七二・安永元）の宗門手札改による統計として琉

琉球人口一七万四一九七人、外にこれより除外された男子行脚人口一四一人を掲げる。両者を合わせた琉球国全人口は一七万四二二一人となる。

d 「列朝制度」にみる十八世紀最終年、寛政期の人口

先に掲げた「列朝制度 卷之六」には、十八世紀最終年の寛政十二年（一八〇〇）に実施された薩摩藩宗門手札改に基づく琉球国人口の統計数値として一五万五六三七人を掲げる。「鹿児島県史 第二巻」は外にこれに除外分の男子行脚人口として一三人を掲げていて、両者を合わせた全人口は一五万五六五〇人となる。

e 「薩藩政要録」にみる十九世紀前期の人口

薩摩藩政の要務に関わる諸制度や規定などをはじめ、藩政運営上参考となる政治・経済・軍事・宗教ほか、さまざまな情報や知識・データ類を豊富に収めた藩政要覧集的な編纂物の一つに文政十一年（一八二八）改編の「薩藩政要録」全六冊（鹿児島大学附属図書館所蔵、「鹿児島県史料集1 薩藩政要録」）がある。この巻四に収める「三九 宗門手札御改人数総之事」は、文政九年（一八二六）に実施された宗門手札改によって得られた薩摩藩人口を、国島嶼別や公私領別・身分階層別・男女別など細かい内訳とともに知ることのできる貴重な史料である。

この書によれば、琉球国の一般集計人口分として官人士身分の者男女計五万〇七〇〇人（按司・親方・士など男二万八八七九人・妻娘など女二万一八二一人）、杜家男女計一〇人、寺院男計八九人、諸在（在郷）身分男女計七万五四一八人、家来其外末々男女計一万四三三二人の合計人口一四万〇五四九人、この外にこれより除外分の行脚人口一六人が計

上されている。両者を合わせた琉球国全人口は一四万〇五六五人となる。

f 「要用集」にみる十九世紀半ば、幕末の人口

前掲「薩藩政要録」の改編史料集（安政元年頃）に「要用集」全六冊がある（鹿児島県立図書館と祁答院町樺山家に分かれ所蔵。「鹿児島県史料28 要用集上」・「同29 要用集下」として分載。「要用集」は「薩藩政要録」の異称）。この巻四「三九 宗門手札御改人数総之事」には、嘉永五年（一八五二）の薩摩藩宗門手札改で得られた各種人口データが収められている。

これによれば、琉球国人口の一般集計分として官人士身分者男女計五万〇〇九一人（按司・親方・士など男三万〇二二一人・妻娘など女一万九七七〇人）、杜家男女計一〇人、寺院男計八四人、諸在男女計六万七八二一人、家来其外末々男女計一万四六五六人の合計人口一三万二六六二人、この外に除外分の行脚人口一六人が計上されていて、両者合わせた琉球国全人口は一三万二六七八人となる。

3 明治初期、琉球藩から沖縄県設置直後の頃の琉球人口

近世を通じて日中に両属していた琉球国は、明治四年（一八七二）の廃藩置県後しばらく鹿児島県の所管とされていたが、翌五年（一八七二）九月、明治新政権が国王尚泰を琉球藩主として華族に列したことにより琉球藩として所管を外務省に移され、その後内務省への移管を経て、明治十二年（一八七九）四月に藩制が廃止されて沖縄県が設置された。

この琉球藩設置前後の時期から沖縄県設置直後の頃の琉球にはどれくらいの人口があったのだろうか。明治初期の激動・変革期の琉球社会に

対する今後の研究の参考までに、この時期四期の人口を掲げておく。

a 「琉球藩雑記」にみる藩制施行直後、明治六年の人口

琉球藩の設置直後に日本政府の求めに応じて作成され、翌六年（一八七三）二月二十六日付で琉球藩人別改奉行今帰人王子外二名の連名でもって報告された詳細な人口・戸籍統計資料に「明治六年大蔵省調 琉球藩雑記」（沖繩県史 第14巻資料編4）がある。

同書の「（二）琉球藩戸籍総計」に収められた人口データによると、明治六年初頭における琉球藩全人口は一六万六七八二人（男八万三〇九〇人・女八万三六九二人）で、その族籍別の内訳は士族五万九六一五人（男二万九七九三人・女二万九八二三人）、僧侶男七八人、祠官（神官）一〇〇人（男五七人・女五三人）、平民一〇万六九七九人（男五万三二六二人・女五万三八一七人）となっている。

b 「沖繩志」にみる「琉球藩雑記」とほぼ同期の人口

「沖繩志 一名琉球志」全五巻（青潮社「沖繩志（琉球志）」）は、伊知地貞馨が著し明治十年三月に版權を得た沖繩の最初の総合地誌とでもいうべき書である。幕末維新期に堀仲左衛門ついで伊知地壯之丞と名乗り島津久光側近の重職に用いられたり、維新後は参政に任じられて薩摩藩政の改革に従事したりして活躍した伊知地は、明治四年（一八七一）の秋から九年（一八七六）二月に至る間、鹿児島県や外務省・内務省の琉球担当の官吏に任じられて、その間数回渡琉（最後は明治八年）して多くの時期を在琉して日本政府と琉球政府との関係折衝にあたった。

「沖繩志」は、この任を解かれた直後の伊知地の著作で、記述内容の

多くは彼が在琉中や在職中に集めた資料やデータ類に基いて記してあるものと推測される。この書によれば、明治六年（一八七三）以降九年頃の間のものと推測される統計記事にみる琉球全人口は一六万七〇六七人（男八万三六〇二人・女八万三四六五人）で、族籍別の内訳は華士族五万九千八二〇人・平民一〇万七二四七人となっている。

c 沖繩県の設置直後の人口

明治十二年（一八七九）四月、琉球藩は廃止され沖繩県が設置された。その翌年の琉球人口が「沖繩県統計概表（抜粋）」（沖繩県史 第20巻資料編10）に収められている。これによれば明治十三年（一八八〇）の沖繩県全人口は三五万三三七四人（男一七万七四九六人・女一七万五八七八人）となっている。

そして「沖繩県統計集成」（沖繩県史 第20巻資料編10）は、これより三年後の人口を収める。これによると、明治十六年（一八八三）の沖繩県人口は三六万一八〇五人（男一八万三二四一人・女一七万八五六四人）となっている。

4 琉球の人口動態の特徴

第1表は、以上に掲げた各種史料の確認を通して得られた近世から明治初期の琉球人口を示したものである。この節のまとめとして、表に基づいて近世の琉球国時代から明治初期の沖繩県設置直後の時期に至る間の琉球人口の動態の特徴について指摘したい。

先ず近世前半期の琉球国の人口推移をみると、初めの頃はともかく半ば過ぎ以降には人口増加がとにかく著しい。江戸初期の寛永中期（一六

第1表 近世～近代初頭の琉球における男女別人口・比率の推移

西暦(和暦, 中国暦)	男子(人)〈人口比率〉	女子(人)〈人口比率〉	全人口(人)〈人口比率〉
1632年(寛永9, 崇禎5)	53,610 〈49.2%〉	55,348 〈50.8%〉	108,958 〈100%〉
1636年(寛永13, 崇禎9)	54,496 〈48.8%〉	57,173 〈51.2%〉	111,669 〈100%〉
1659年(万治2, 順治15)	55,721 〈49.4%〉	57,043 〈50.6%〉	112,764 〈100%〉
1665年(寛文5, 康熙4)	54,188 〈49.2%〉	56,053 〈50.2%〉	110,241 〈100%〉
1672年(寛文12, 康熙11)	57,540 〈49.4%〉	58,943 〈50.6%〉	116,483 〈100%〉
1677年(延宝5, 康熙16)	60,558 〈49.6%〉	61,655 〈50.4%〉	122,213 〈100%〉
1684年(貞享元, 康熙23)	64,235 〈49.4%〉	65,760 〈50.6%〉	129,995 〈100%〉
1690年(元禄3, 康熙29)	63,430 〈49.3%〉	65,137 〈50.7%〉	128,567 〈100%〉
1699年(元禄12, 康熙37)	69,195 〈49.0%〉	71,992 〈51.0%〉	141,187 〈100%〉
1706年(宝永3, 康熙45)	76,026 〈49.0%〉	79,082 〈51.0%〉	155,108 〈100%〉
1707年(宝永4, 康熙46)			155,261 〈100%〉
1713年(正徳3, 康熙52)			157,760 〈100%〉
1721年(享保6, 康熙60)	80,009 〈47.7%〉	87,662 〈52.3%〉	167,671 〈100%〉
1729年(享保14, 雍正7)			173,969 〈100%〉
1750年(寛延3)頃			約20万人位 〈100%〉
1761年(宝暦11, 乾隆26)			188,530 〈100%〉
1772年(明和9, 乾隆37)			174,211 〈100%〉
1800年(寛政12, 嘉慶5)			155,650 〈100%〉
1826年(文政9, 道光6)			140,565 〈100%〉
1852年(嘉永5, 咸豊2)			132,678 〈100%〉
1873年(明治6)	83,090 〈49.8%〉	83,692 〈50.2%〉	166,782 〈100%〉
1873～6年(明治6～9)	83,602 〈50.0%〉	83,465 〈50.0%〉	167,067 〈100%〉
1880年(明治13)	177,496 〈50.2%〉	175,878 〈49.8%〉	353,374 〈100%〉
1883年(明治16)	183,241 〈50.6%〉	178,564 〈49.4%〉	361,805 〈100%〉

【典拠】①「薩藩例規雑集二五」・②「貞享元年薩藩幕府諸国巡見使応答案」(以上、東京大学史料編纂所蔵「島津家文書」)③「列朝制度卷之六」(都城島津家所蔵、『藩法集8 鹿兒島藩上』)④田名真之『近世沖繩の素顔』⑤蔡温「独物語」(『蔡温選集』)⑥「琉球館文書」中の第19号文書「明和五年九月廿五日薩摩藩庁宛琉球館届」(琉球大学附属図書館所蔵『那覇市史資料編第1編の2』)⑦『鹿兒島県史二』⑧「薩藩政要録四」(鹿兒島大学附属図書館所蔵、『鹿兒島県史料集1』)⑨「要用集 四」(鹿兒島県立図書館所蔵、『鹿兒島県史料集2』)⑩「明治六年 琉球藩雜記」(『沖繩県史第14巻資料編4』)⑪伊知地貞馨「沖繩志」(青潮社『沖繩志(琉球志)』)⑫「明治十三年 沖繩県統計概表」(『沖繩県史第20巻資料編10』)⑬「沖繩県統計集成」(『沖繩県史第20巻資料編10』)



三〇年代)に一〇万人台後半にあった同国人口は、十七世紀前・中期にかけて一十万人前後に停滞的に推移した後、同世紀の後半半ばの寛文期(一六七〇年代)を過ぎる頃から漸増状態に移行して少しずつ増えつつきている。その後、十八世紀が間近に迫った元禄後期頃(一六九〇年代)に至って人口は急増状態に入り、宝永・正徳・享保期を経て十八世紀半ばまでの約半世紀余の間に爆発的に伸びて、寛延年間(一七五〇年前後の頃)には近世初期の約二倍、二〇万人位にまで増えている。

次に近世後期の琉球国人口の推移をみると、その動態は近世前期とは対照的である。十八世紀半ばの寛延年間辺りに二〇万人位でピークに達した同国人口は、その直後の宝暦年間(一七五〇―一七六〇年代)頃から一転して減少傾向に陥り、以後幕末にかけては下降の一途を辿って、一世紀後の十九世紀半ば嘉永年間(一八五〇年代)には一三万人台前半へと、その規模は十七世紀末の人口爆発現象が起こる直前段階の数量に後退していつている。

第三に、幕末維新期から明治初期の琉球藩設置(明治六年―一七七二年)前後の頃の琉球国人口についてみると、この時期、同国では再び人口の増加傾向に移行し大きく増え始めたことがうかがえる。

第四に、琉球藩設置直後の明治六年(一七七二)段階と沖縄県設置直後の同十三年(一八八〇)及び十六年(一八八三)の明治十年代半ばの人口を比較した場合、この間の人口は不自然なくらいに増加が極めて著しい。明治六年から十三年までのわずか八年間に増えた人口約十九万人と、明治六年の大蔵省把握の人口数値の二倍以上に琉球人口は膨れ上がった。この短期間における人口数量の急増の意味しているところや背景、理由については、現段階の筆者には論及できる史料情報や能力がな

い。今はデータのみを掲げておきたい。

第五に、近世を通じての全人口に占める男女別の人口比率をみた場合、当該期の本土地域の一般的な幕府・諸藩領社会においては、いずれの地域でも男子人口が女子人口よりも多く、近世でも早い時期ほど男子の方が女子よりも人口比率が高く、両者人口の格差大きい男子優勢社会がふつうにみられ、近代に近づくほどその格差は小さくなって両者人口半ばする男女均衡型社会に近づいていくことが知られている。琉球国の場合、本土地域の薩摩藩領や一般幕藩領とは異なって、近世初頭の寛永年間には既に人口的に男女均衡型社会が出現し展開していた。

## 二 十七世紀後期、延宝期の三州本領域の人口

過日、前九州大学教授の松下志朗氏(現福岡大学)より、京都大学文学部の旧陳列館(現古文書室)所蔵「古文書集六」中に延宝五年(一六七七)の薩摩藩宗門手札改の際に把握された薩摩国・大隅国・日向国諸県郡の三州本領域人口を知ることのできる「延宝五年丁巳年札改薩隅日人数一紙目録」という史料が収められていることを教えられ、その一部を抜き書きした解説文の提供を受けた。そしてつい最近、京都大学の有坂道子氏の好意により史料の記事全文を知る機会に恵まれた。

これは、現段階では、薩摩藩三州人口を主な身分階層別に男女別の内訳とともに知ることのできる最古の貴重な史料である。以下、先ず史料の全文を紹介したい。

延宝五丁巳年札改

薩隅日人数一紙目錄

合男拾九萬九千四百七拾壹人

合女拾四萬二百九拾四人

合生男貳萬貳千六百六拾八人

合生女壹萬六千七百九人

人数壹萬八拾人 先改二増

内九千六百貳拾七人 生子増

四百五拾三人 他国入増

都合男女三拾七萬九千四百四拾貳人

右之内

男女七萬貳千八百七拾七人 諸士

内男三万七千五百五拾七人

女貳万七千五百九拾壹人

生男四千五百貳拾九人

生女三千貳百人

男女四千四百六拾八人 諸座付者

内男貳千四百八拾人

女千五百四拾人

生男貳百六拾七人

生女百八拾壹人

男女壹萬三千三百四拾六人 寺社家付門前

内男八千四百六拾三人 但出家千七百三拾八人相籠

女三千七百七拾四人

生男六百六拾五人

生女四百四拾四人

男女四萬三千八百六拾壹人 町濱

内男貳万貳千八百八拾七人

女壹万七千百拾壹人

生男貳千六百三拾六人

生女千九百貳拾七人

男女拾六万七千三百八拾七人 在郷

内男八万七千貳百貳拾貳人

女六万七千七百五拾壹人

生男一万三百七拾三人

生女八千四拾壹人

男女七万四千三百五拾三人 又内付又々内

内男三万九千八百貳人

女貳万七千四百六拾七人

生男四千八百八拾三人

生女貳千九百壹人

男女貳千八百五拾人 牢人并抱者付所々

内男千八百拾壹人

女千九人

生男拾五人

生女拾五人

外

男女千八拾壹人 慶賀

行脚  
死苦  
乞食

午十月三日

これによると、延宝五年の薩隅日三か国の薩摩藩本領域部の人口は、宗門手札改の際の一般集計人口分で三七万九一四二人（男二万二二三九人・女一五万七〇〇三人）、この外に一般集計から除外された慶賀・行脚・死苦・乞食等の人口一〇八一人がいて、両人口を合わせた薩摩藩三州本領域全人口は三八万〇二二三人である。

また、全人口の九九・七%余を占める前者の一般集計人口分については身分別の人口とその内訳人口まで知ることができる。参考までに掲げると、諸士（武士身分者）が男女七万二八七七人（男四万二〇八六八・女三万〇七九一人）、諸座付者が男女四四六八人（男二七四七人・女一七二一人）、寺社家付門前が男女一万三三四六八人（男九二二八八人・女四二一八八人）、町浜人が男女四万三八六一人（男二万四八二三人・女一万九〇三八八人）、在郷（百姓）が男女一六万七三三七七人（男九万七五九五九人・女六万九七七九二人）、又内付又々内男女が七万四三三三人（男四万三九八五人・女三万〇三六八八人）、牢人並抱者付所々が男女二八五〇人（男一八二六八人・女一〇二四八人）となっている。

慶賀・行脚・死苦・乞食等の人口については男女内訳人口を知ることができないのであるが、ちなみに蛇足ながら、前掲各身分毎の男女別人口の存在状況や比率等を考慮に入れて、延宝五年段階の一般集計人口分に前掲除外分男女人口一〇八一人を合算した三州本領域人口三八万〇二

二三人に占める男女の人口内訳を推計すると男二万二千人台・女一五万七千人台となって、それぞれが全体人口に占める比率は男子五八%台・女子四一%台にあったことが推定できる。

### 三 三州本領域における第一期人口爆発の始期（補論一）

本節では、前節一・二での事実確認や考察により筆者が新たに知り得た薩摩藩の三州本領域部と琉球国の両人口に関するデータや史料情報を付加して、先に本誌で行った「薩摩藩の人口」（第一論文）の報告や考察にいくつかの追加と補正を加える。なお、このことについては同じような目的をもって、つい最近『鹿児島史学45』に発表した「薩摩史研究上の人口動態からみた諸問題」（第二論文）でもいくらか行なっている。以下、その成果も踏まえて稿を進めたい。

筆者は前掲二つの論文において、近世の薩摩藩では、道之島と琉球も含めて、十七世紀前・中期までの人口停滞期を経て寛文期を少し過ぎた十七世紀後期以降十八世紀前期の元文・延享期頃にかけての五、六十年間に一回目の人口の爆発的増加期（第一期人口急増期）があったこと、そしてその後一世紀余の人口停滞期を経て幕末（嘉永期以降）から明治期にかけての十九世紀後半期に再び急激な増加期（第二期人口急増期）があつて、この二つの増加期を経て近世の薩摩藩人口が大きく伸びていることを指摘した。

ところで、三州本領域の第一期人口急増期の始期と終期の時期をもう少し時期を絞り込んでみた場合、それは具体的に十七世紀後期のどの時

期に始まり、十八世紀のどの時期まで続いたのであろうか。

第2表は、前掲両論文で行った考察や本稿の第一節・第二節1での史料データの確認等を通して得られた近世の各時期の薩摩藩の人口数値を国・島嶼別に表に落として、その推移を示したものである。

この表によれば、十七世紀初めの寛永年間に三三、四万人位あったことが推定される薩摩藩の三州本領域の人口は、その後、同世紀半ば過ぎの延宝年間（一六七〇年代中頃）には三八万人強を数えた時期もあったが、その後以前の人口に後退をみせ、全体としてみれば同世紀前期から後期の貞享年間（一六八〇年代中頃）に至る大半の時期は三五万人台半ばあたりを中心に停滞的に推移していたことがうかがえる。しかしながら、その後の増加は著しく、以後宝永年間までの約二〇年間、それからさらに享保内検期までの約二〇年間の両期間、ともに約一〇万人（年平均にして約五千人）規模で急増していつている。

そして道之島と琉球国分を含めた総人口の推移からみる限り、三州本領域の人口は少しペースを落としながらもその後も増え続け、それは十八世紀半ばの延享・寛延・宝暦頃までは続いたことがうかがえる。

以上のデータ確認を通して、三州本領域の場合も、先に明らかにした十七世紀末の元禄年間に人口急増現象が始まった琉球国とほぼ時を同じくして、元禄期頃に第一期の爆発的な人口急増期が訪れ、その増加現象は後半少しペースを落としながらも、これも琉球国とほぼ同じ時期の十八世紀のちょうど中頃までは続いたことが理解される。

#### 四 薩摩藩の人口動態の特徴（補論二）

薩摩藩の人口動態の特徴を把握することは、近世の薩摩藩社会の歴史理解や研究のうえで非常に重要なことと思われる。このことについては、第一論文で若干指摘し、第二論文では要約的にまとめて示したところであるが、その後追補すべきいくつかの新たな事実を発見し、両論文では筆者の意を十分に尽くすことができず言葉足らずの箇所も若干あったので、本稿で補ってまとめ直して、改めて薩摩藩の人口動態の特徴を明らかにしておきたい。

##### 1 二倍以上に増加した薩摩藩三州本領域の人口

第2表は、第一・第二論文と本稿での史料確認や考察を通して得られた薩摩藩の人口推移を国・島嶼別に示している。

一般に江戸時代の人口動態については停滞的イメージをもって語られることが多い。しかしながら薩摩藩の場合、そのような指摘に合致するのは十七世紀前期から後期に至る時期と十八世紀半ば頃から十九世紀半ばに至る百年余のことであって、近世全体を通じてみると、とにかく増加が著しい。

例えば薩隅日三州本領域の人口についてみると、十七世紀前期の寛永年間（一六三〇年代半ば）に三三、三四万人位と推定される人口が、十九世紀後期の藩政終末期、廃藩置県（一八七一年）直前の頃には約七六万人へと二倍以上に膨れ上がっている。

第2表 藩政時代の薩摩藩の国・島嶼別人口推移（含む、琉球国）

	薩摩国 (人)	大隅国 (人)	日向国諸県郡 (人)	薩隅日合計 (人)	道之島 (人)	琉球国 (人)	総計
寛永9年 (1632)						108,958	
寛永13年 (1636)	約16~ 17万位カ	約11~ 12万位カ	63,723	約33~ 34万位カ		111,669	
万治2年 (1659)						112,764	
寛文5年 (1665)						110,241	
寛文年間 (1661~73)	178,101	115,459	60,767	354,327	31,377	110,211	495,915
寛文12年 (1672)						116,483	
延宝5年 (1677)				379,142		122,213	
貞享元年 (1684)	183,376	117,583	54,428	355,387		129,995	
元禄3年 (1690)						128,567	
元禄12年 (1699)						141,187	
宝永3年 (1706)				461,961	49,472	155,108	666,541
宝永4年 (1707)						155,261	
正徳3年 (1713)						157,760	
享保6年 (1721)						167,672	
享保内検期 (1722~27)	29万台半カ	18万台カ	8万台半ばカ	56万位カ	6万2,3千カ	16~17万位カ	約78~ 79万位カ
享保14年 (1729)						17万人台	
元文2年 (1737)							817,635
延享2年 (1745)							843,808
寛延3年 (1750)頃						20万人位	
宝暦3年 (1753)							872,083
宝暦11年 (1761)						188,530	879,539
明和9年 (1772)					74,910	174,211	887,222
天明6~7年 (1786-87)							842,406
寛政6年 (1795)頃カ				623,627			
寛政12年 (1800)	373,046	177,312	76,971	627,329	74,593	155,650	857,562
文政9年 (1826)	404,774	169,830	76,598	651,202	77,667	140,565	869,434
嘉永5年 (1852)	393,527	157,111	74,727	625,365	85,125	132,678	843,168
明治4年 (1871)頃	46万3,4千カ	21万台~ 22万台カ	約7万9千カ	76万台カ			
明治6年 (1873)						166,782	
明治6-9年 (1873-6)頃						167,067	
明治13年 (1880)						353,374	
明治16年 (1883)						361,805	

## 2 全体でも二倍近くに増加した薩摩藩人口

同じような指摘は、薩隅日三州本領域に道之島と琉球国を加えた全体人口（以下、総人口）の推移を把握できる十七世紀半ば以降の総人口についてもできる。すなわち寛文年間（一六六〇年代半ばから一六七〇年代初頭）に四九万六千人弱だった総人口は、その後増加の一途を辿り最大に達したピーク時の十八世紀半ばの明和九年（一七七二）には八八万七千人へと一・八倍もの増加をみせている。その後若干減少しているが、それでも幕末の嘉永年間（一八五二）八四万三千人余で寛文期の一・七倍の数量を示している。

## 3 二つの爆発的人口の急増期

第三番目には、薩摩藩の人口増加が一定の平均的な増加によってもたらされたものではなく、増加人口の大半は約一世紀余の人口停滞期（十八世紀中頃～十九世紀中頃）の前後に存在した二つの人口急増期にもたらされていることである。

すなわち三州本領域部の人口、もしくはそれに道之島・琉球国まで含めた総人口の推移に注目すればわかるように、薩摩藩の人口は三州本領域部のそれぞれの地域別や全体でも、また琉球単独でも、近世前期の十七世紀初頭から後期にかけては停滞的状态に近い緩やかな漸増傾向を示していたが、十七世紀も終末期に近づいた元禄期頃から十八世紀半ば（延享・寛延期頃まで）にかけての五、六十年間、いずれの地域でも爆発的な勢いで急増を続けたことがわかる。

そうして増加した薩摩藩人口は、全体人口でみて延享・寛延期頃を境に漸増状態に移行して、十八世紀後半期半ばの明和年間にはピークに達

して八八万人台を示しているが、直後には急減して十八世紀末の天明年間（一七八六、七年頃）には延享期の水準に後退している。その後はほとんど停滞的状态の中で緩やかに増加していつて文政年間（一八二〇年代）には八七万人前後まで回復をみせるが、十九世紀半ばの嘉永年間（一八五〇年代）には再び一世紀前の延享期の水準に戻っている。

延享期頃から嘉永期に至る百年余りの薩摩藩の人口動態を全体としてみれば、総人口がほとんど増えることのなかった人口停滞期にあったとみることができる。

筆者は、その後薩摩藩に至る幕末・維新期の五地域全てを合わせた総人口を確認できる史料やデータを持ち合わせていないので、その期間の総人口の動態には厳密な言及はできないのであるが、ただ幕末期と明治初期の薩隅日三州本領域の合計人口と琉球国人口を対比して見る限りでは、嘉永期を過ぎた幕末段階から明治期にかけての十九世紀後半期には道之島・琉球を含めた薩摩藩全域で再び人口の急増現象が起り進展していったことがうかがえる。

## 4 同じような人口動態をみせた近世前期の藩領五か地域

第四番目に、薩摩藩の三州本領域部と道之島・琉球国の人口のそれぞれについて、確かな人口値が確認できる十七世紀半ばの寛文年間と約半世紀余を経た十八世紀前半の享保年間の人口（享保内検期の推定人口）とを地域ごとに対比してみた場合、薩摩藩が一七万八千人余からの推定約二九万人台へと約一一人位位の増加、大隅国が一・二万五千人余から同一八万人台へと約七万人位の増加、日向諸県郡が六万人余から同八万人台へと約二万人位の増加、道之島三万一千人余から同六万人余へと約三

万人の倍增、琉球国が一万人強の人口から同一六、七人前後へと約五、六万人の増加があったことが推測される。

薩摩藩領の五か地域では、どの地域でも十七世前期から中期にかけての人口の停滞的状态を経た後、同世紀末から十八世紀前期にかけての約半世紀余の期間に爆発的な人口増加が進展していつている。薩摩藩領五か地域は近世前半期にはほぼ似た人口動態をみせている(第2表)。

## 5 地域格差の著しい近世中期以降の人口動態

第5番目の特徴として、十八世紀半ば以降、明治維新期に至る近世中・後期の薩摩藩の人口動態を地域別にみた場合、そのあり方や人口動態は一樣ではない、地域格差が極めて大きいことである。

例えば、幕末の嘉永年間の人口を先の享保内検期の人口と対比してみた場合、薩摩国は二九万人台から三九万三千人余へと享保期から約一〇万人位の増加、大隅国は一八万人台から一五万七千人余へと逆に二、三万人位の減少、日向諸県郡は八万人台から七万四千人へと約一万人前後の減少、道之島は六万人余から八万五千人余へと約二万人の増加、琉球国は一六、七万人位から一三万二千人余へと三、四万人位の減少となっている。

十八世紀半ば以降の近世中・後期、五地域のうち薩摩国と道之島は、近世前期末以降も、中・後期を通じてほぼ一貫して人口は大きく増え続け、幕末には、近世前期の寛文期に比して、薩摩国で二・二倍、道之島で三倍弱(二・七倍)に達している。

これに対して大隅国・日向諸県郡・琉球国は全体を通じては低い人口増加に止まっている。大隅国の場合、少なく見積もっても享保期には一

九万人台から二〇万人を少し越えた水準にまで伸びていたことが推測される人口が、その後のある時期から減少に転じて、幕末には近世前期の一・三倍位の水準にまで後退している。

日向国諸県郡の場合、十八世紀前期の享保年間頃には八万人台には達していたことを推測できるのであるが、その後、大隅国と同じように同世紀の中・後期のある時期に減少に転じて、十九世紀には七万人台半ばでの停滞的状态に陥り、幕末の嘉永年間には寛永期のわずか一・一倍強の人口規模に後退している。諸県郡の人口は近世のほとんどの時期を通じて停滞的に終始したと指摘できる。

琉球国の場合、享保期に一六、七人台に達していた人口は、それ以降も十八世紀半ばにかけてしばらくは引き続き増えて、寛延年間(一七五〇年頃)には約二〇万人へと近世初期の二倍近くにまで増えたが、十八世紀半ばの宝暦期頃から一転して減少状態に陥り、その後は下降の一途を辿って十九世紀半ばの嘉永年間には一三万人余と、寛永年間の僅かに一・二倍、人口急増現象の発生する直前段階の十七世紀末の規模に大きく後退している。

## 6 近世中期まで続いた三州本領域の男子優勢社会

近世の幕藩制封建社会下のそれぞれの幕藩領の全体人口に占める男女の内訳をみた場合、一般に近世でも早い時期ほど男子の占める比率が女子を大きく上回る男子人口優勢社会がみられるのに対し、近代に近づくほど両人口の比率格差は小さくなって、やがて相半ばする男女人口均衡型社会に近づいていくことを前節で指摘した。

薩摩藩の薩隅日三州本領域の場合、幕末から明治維新期の藩政終末期

段階では、その男女人口比率（明治四年で男子約五二％・女子約四九％）は、ほかの幕藩領の社会とさほど大きく変わるところはないが、寛永十三年（一六三六）の「堺目武具人数注文」や延宝六年（一六七七）の手札改の際の「薩隅日人数一紙目録」、及び「列朝制度」に収めた宝永三年（一七〇六）の人口史料に拠れば、十七世紀前期から十八世紀初頭に至る近世前期の薩摩藩の男女人口内訳は、男子五八％前後・女子四二％前後と両人口の人口格差は大きく、薩摩藩本領域部の三州社会はいずれも男子人口の圧倒的に大きい男子優勢社会であった（第3表）。

このような圧倒的に男子人口の優勢な社会は、享保六年に薩摩藩が幕府に提出した「薩摩大隅日向諸県郡御領内田畑町歩男女人数公義江被書上候帳面写一冊」（東京大学史料編纂所蔵「島津家文書」）によると、この時期でも男子約五七％・女子四三％位での人口比率が推測でき、こういった薩摩藩の人口的に男子優勢社会は近世前半期のほぼ全ての時期を通じて続いたことが理解される。

蛇足ながら、「列朝制度」の十八世紀末期の寛政六年（一七九四）の「寛政御答書」の抜書記事に拠ると、この時期になると男女比率の格差はかなり詰まってきたているが、それでも男子約五四％強・女子四六％弱と、当時藩外の一般的な近世社会と比べれば、まだかなり男子人口の優勢な薩摩藩社会は続いているように見受けられる。

## 7 早くから男女均衡型社会の道之島と琉球国

藩政時代の道之島の男女人口比率を知ることができる人口史料には、「列朝制度」に収めた宝永三年（一七〇六）のものと「大御支配次第帳」に収めた「道之島惣一紙総」や「薩隅日琉球高松総」がある。前者によ

ると、宝永期の道之島人口四万九千四百七十二人に占める男女比率は、男子人口が僅かに上回る程度のほぼ男女半々の人口状態で、男五〇・六％（二万五〇五一人）・女四九・四％（二万四千四二一人）となっている。また後者によると、享保内検期六万二、三千人に占める男女の人口比率は、それぞれ約五〇％（男女とも三万一千台前半と推測される）とほぼ等しく、両者の人口が均衡した状態にあったことが推測される。薩摩藩の三州本領域では藩政終末期段階になってようやくやってみられるような男女均衡型社会が、道之島では十八世紀初頭にいち早く出現していた（第4表）。

また近世の琉球国の男女人口の比率については、前節でも述べたように、「薩藩例規雑集」に収めた「琉球国人口概数」によって、寛永期以降享保期までの間の一〇期について知ることができる（第1表）。このうち最古の寛永九年（一六三二）の場合、全人口一〇万八千九百八十八人に占める男子は五万三千六十一〇人（四九・二％）で女子は五万五千三百七十八人（五〇・八％）で、これより約半世紀を経た貞享元年（一六八四）で、全人口一十二万九千九百五十五人のうち男子六万四千三百三十五人（四九・四％）・女子は六万五千六百二十〇人（五〇・六％）、これからまた約半世紀近くを経た享保六年（一七二二）で、全人口一十六万七千七百七十二人のうち男子八万〇〇〇九人（四七・七％）・女子は八万七千七百六十三人（五二・三％）となっている。琉球国では、近世初期には既に男女人口が均衡した社会が出現している。それは女子人口がやや優勢な男女均衡型社会として存続している。

近世前・中期、人口面からみて圧倒的な男子優勢型社会が一般的であった薩摩藩の三州本領域に対して、同期の琉球国や道之島では早くから異質な構造の男女均衡型社会が出現し展開していたことが理解される。



第3表 近世の薩隅日三州の薩摩藩領域における男女別の人口・比率の推移

西 曆 (和曆)	男子(人) 〈人口比率〉	女子(人) 〈人口比率〉	全人口(人) 〈人口比率〉
1636年 (寛永13)	19~20万位カ 〈約58%〉	14~15万位カ 〈約42%〉	33~34万位カ 〈100%〉
1677年 (延宝5)	22万2千台 〈58%台〉	15万9千台 〈41%台〉	380,223 〈100%〉
1706年 (宝永3)	267,358 〈57.9%〉	194,603 〈42.1%〉	461,961 〈100%〉
1722~7年(享保内検 期)頃 (享保7~12)	31~32万位カ 〈約56-57%〉	24~25万位カ 〈約43-44%〉	56万前後カ 〈100%〉
1794年 (寛政6) 頃	338,765 〈54.3%〉	284,862 〈45.7%〉	623,627 〈100%〉
1871年 (廃藩置県直前 段階) (明治4)	39万前後カ 〈約51%〉	37万前後カ 〈約49%〉	76万台カ 〈100%〉

【典拠】①「続編島津家正統系図十八代家久第七十七」の「寛永十三年正月吉日堺目人数武具注文」(東京大学史料編纂所蔵「島津家文書」,『鹿児島県史料 旧記雑録後編五』の901号文書)②「古文書集六」中「延宝五丁巳年札改薩隅日人数一紙目録」(京都大学文学部陳列館所蔵)③「列朝制度 卷之六」(都城島津家所蔵,『藩法集8 鹿児島藩上』)④「大御支配次第帳」の「薩隅日三州一紙惣総」・「三州高弘」(鹿児島県立図書館所蔵,『薩摩半島の総合的研究』),並びに「享保六年丑十二月十六日薩摩・大隅・日向諸県郡御領内田畑町歩男女人数、公儀江被書上候帳面写一冊」(東京大学史料編纂所蔵「島津家文書」)⑤『薩隅日地理纂考』

第4表 近世の道之島における男女別の人口・比率の推移

西 曆 (和曆)	男子(人) 〈人口比率〉	女子(人) 〈人口比率〉	全人口(人) 〈人口比率〉
1706年 (宝永3)	25,051 〈50.6%〉	24,421 〈49.4%〉	49,472 〈100%〉
1722~27年 (享保内検期)	3万1千台前半カ 〈約50%〉	3万1千台前半カ 〈約50%〉	6万2~3千カ 〈100%〉

【典拠】①「列朝制度 卷之六」(都城島津家所蔵,『藩法集8 鹿児島藩上』)②「大御支配次第帳」中の「道之島惣一紙総」・「薩隅日琉球高弘総」(鹿児島県立図書館所蔵,『薩摩半島の総合的研究』)

## 8 百姓の少ない三州本領域の社会

第5表は、薩隅日三ヶ国内の薩摩藩の三州本領域の人口動態を大まかに身分別で示したものである。

三州本領域内の社会の特徴として、幕府領や他の一般大名領に比べて、人口面からみた武士身分者人口の多さ、あるいは全体人口に占める武士身分者の人口比率の高さが古くから指摘されてきたことは周知のところ、それは掲げた表によっても確認される。

これに対して、これまで在郷(村)居住の百姓(農民)身分者の人口や比率があまり注目されて問題とされたことはなかった。三州本領域の百姓身分者の人口と比率は、人口爆発が起こる直前の延宝五年(一六七七)で全人口三八万〇二三人のうち一六万七三七八人(約四四%)、人口爆発途上の宝永三年(一七〇六)で全人口四六万一九六一万人のうち二万三三六九人(約四六%)、但し領外居住の〇・二%分、八七六人は含まず)、人口停滞状態にあった藩政後期の文政九年(一八二六)で全人口六五万二〇二人のうち三三万三七七二人(約五二%)、同じく幕末の嘉永五年(一八五二)で全人口六二万五千人余のうち三〇万七二五四人(約四九%)であった。

以上に掲げた数量から、薩摩藩の三州本領域部の百姓身分者人口は、その占める比率からみて多い時期でも全体人口の過半数をわずかに上回る程度であって、近世を通じておおかたの時期は過半数にも届くことがなかった、異常に百姓身分者人口の比率の低い封建社会であったことがわかる。

## 9 多くの浦浜人を抱えた三州本領域社会

三州本領域の町人身分者(城下三町人や野町人等)の人口や動態は、武士身分人口と同じく早くから研究者に注目されてきた人口で、その特徴は絶対人口の寡少さとともに人口動態における停滞性として認識されてきている。このことは実際のデータでも裏付けられる(第5表)。

ところで、これとは対照的に、これまで百姓人口ともどもあまり関心を寄せられることのなかったものに浦浜人身分者の人口がある。

三州本領域の浦浜人身分者人口については、第5表にみるとおり、十七世紀の近世前期のものは知ることはできないが、中期以降については確認できる史料がある。これらのデータによると、薩摩藩三州本領域内における浦浜人身分人口は少数の塩屋・半浦人口を含めて、享保内検期(二七二〇年代)で推計全人口五六万人前後のうち四万二八七四人(八%弱)、文政九年(一八二六)で全人口六五万一千人余のうち五万二一九〇人(八%)、嘉永五年(一八五二)で全人口六二万五千人余のうち五万〇一一八人(約八%)である。

ところで十八世以前の近世前期の三州本領域の浦浜人身分者人口に関するところ、その数量や比率を確実に把握できる史料を目下のところ筆者は知らないが、例えば前掲の「延宝五年丁巳年札改薩隅日人数一紙目録」によれば、延宝五年(一六七七)の町人と浦浜人身分者を合算した人口は四万三八六一人で、その全体人口三七万九一四二人に占める比率は一一%強を示し、前掲の享保内検期・文政九年・嘉永五年の三期の人口比率(ともに一〇%余)とさほど大きな差は認められない。薩摩藩の三州本領域における浦浜人身分者人口の高率な社会は、既に十七世紀半ば過ぎには出現していたことがわかる。

第5表 薩摩藩領の薩隅日三州の身分別人口

I. 武士身分者と非武士身分者の人口

	延宝5年 (1677)	貞享元年 (1684)	享保内検 (1722~27)	文政9年 (1826)	嘉永5年 (1852)	明治4年頃 (1871)
武士身分人口	72,877	76,980		173,981	17万2千台	23万台カ
A 城下士	A ※	A 10,001	※	A 17,100	A 18,474	※
B 郷土・家中士	B ※	B 66,979	※	B 156,881	B 153,000台	※
非武士身分人口	307,346	278,407	※	477,221	45万3千台	53万台カ
合計	380,223	355,387	56万位	651,202	62万5千台	76万台カ

II. 主な非武士身分人口（百姓・町人・浦浜人、外）の内訳

	延宝5年 (1677)	貞享元年 (1684)	享保内検 (1722~27)	文政9年 (1826)	嘉永5年 (1852)	明治4年頃 (1871)
百姓(農民)人口	167,387	※	25万7~9千	333,727	307,254	37~38万位カ
町人の人口	43,861	※	16,272	15,108	14,473	※
(a)城下三町			(a) 6,408	(a) 4,941	(a) 4,040	
(b)野町			(b) 9,864	(b) 10,167	(b) 10,433	
浦浜人等の人口	43,861	※	42,874	52,190	50,118	※
(c)浦浜				(c) 51,475	(c) 49,393	
(d)塩屋				(d) 510	(d) 531	
(e)半浦				(e) 205	(e) 194	
武士下人・足軽・ 中宿・諸座付・寺 社門前等の人口	95,017	※	※	68,915	73,800位	※
慶賀・穢多等 の人口	1,081	※	※	5,024	5,339	※

注1. 本表は京都大学文学部陳列館所蔵「延宝五丁巳年札改薩隅日人数一紙目録」、及び東京大学史料編纂所蔵「(貞享元年)薩藩幕府諸国巡見使応答案」、鹿児島県立図書館所蔵「大御支配次第帳」、鹿児島大学附属館所蔵「薩藩政要録」、東京大学史料編纂所蔵「要用集四」、『薩隅日地理纂考』による。

薩摩藩の三州本領域社会では近世前期の早い時期から、一般の幕府領や諸大名領には類をみることができない、全人口の約一割に迫る相当数の浦浜人身分者を抱える封建社会が出現していて、それは幕末まで変わることなく存続したことが理解される。

## 10 ほとんど百姓身分者のみの道之島

近世の道之島人口のほとんどは百姓身分者によって占められていたという歴史事実はあまねく知られているが、その程度を三州本領域との比較で理解してもらうために参考までにデータを提示しておく。

道之島の百姓身分者の人口比率が知られる最古の史料は「列朝制度」に収めた宝永三年（一七〇六）のものである。これによると、同期の道之島の身分別の人口と比率は、全人口四万九千四百七十二人のうち在郷人口（百姓人口）四万九千三百二十一人（九九・七％）、その他一七〇人（流人）となっている。

また「薩藩政要録」と「要用集」によれば、十九世紀前期から幕末期の身分別の人口内訳を知ることができる。「薩藩政要録」によれば、文政九年（一八二六）の道之島の場合、全人口七万七千六百七十一人に占める内訳人口は在郷身分七万六千八百一十四人（九八・九％）、郷士（士分）格身分人口一九九二人（〇・二％）、その他六六一人（流人六三四人・同赦免居付者二六人・出家人一人）で、「要用集」によれば、嘉永五年（一八五二）の場合、道之島全人口八万五千二百五十一人に占める内訳人口は在郷身分八万二千八百八十二人（九七・二％）、郷士格身分一五六六六人（一・八％）、その他七十七人（流人七十七人・同赦免居付者六人）となっている。

## 11 官人士身分者の増加し続けた琉球国

琉球国の人口は、近世前期には道之島に次いで多くの百姓（在郷）身分者によって占められていたが、その後官人士身分人口が大幅に増えている。この官人士にその下人や家来身分の人口を加えると、それらの人口は十九世紀前期には在郷身分人口と同国人口を折半する状態となっている。

「列朝制度」の宝永三年（一七〇六）の統計によると、琉球国全人口一五万五千八百人の身分別内訳は在郷人口一十二万七千七百八十人（八二・三％）、官人士身分一万四千四百一十四人（九・〇％）、官人下人・家来身分一万三千三百三十四人（八・五％）、その他一八〇人（出家一七五人・流人五人）であったが、「薩藩政要録」によれば、文政九年（一八二六）の琉球国の場合、全人口一十四万〇五百五十五人のうち在郷身分は七万五千四百一十八人（五三・七％）、官人士身分者五万〇七千九百九十九人（三六・一％）、その家来外末々の者一万四千三百三十三人（一〇・二％）、その他二一五人（寺院八十九人・出家一〇人・行脚一六人）となっており、嘉永五年（一八五二）の場合、全人口一十三万二千六百七十八人のうち在郷身分は六万七千八百二十一人（五一・一％）、官人士身分者五万〇一十八五人（三七・八％）、その家来外末々の者一万四千六百六十六人（一一・〇％）、その他一一〇人（寺院八十四人・出家計一〇人・行脚一六人）となっている。

琉球国では、近世を通じて官人士身分者の人口が大きく増え続けた一方で、それとは裏腹に在郷身分者は減り続けていったことが理解される。

## 五 特徴ある人口動態の歴史背景、二例（補論三）

薩摩藩のさまざまな特徴ある人口動態の背後には、同藩のどんな歴史事実が潜んでいるのか、本稿では二つを取り上げて考察し、その具体的背景、すなわち特徴の背後に潜む薩摩藩の歴史事実を明らかにする。

### 1 三州本領域の第一期人口爆発の背後に潜む歴史事実

#### a 人口爆発直前の薩摩藩農政

前節で、藩政期の薩摩藩の人口動態をながめるとき、同藩には二つの爆発的な人口急増期があり、薩隅日三州本領域の場合、第一期の急増期は十七世紀も終わりに近い元禄期頃から翌十八世紀中頃にかけての五、六十年間であることを指摘した。本節では、この第一期の人口急増のおこった歴史的背景や発生要因について考えてみたい。

三州本領域における第一期の爆発的な人口急増と密接に関わり、そのことへの理解には不可欠であるので、最初にその社会現象が出現する直前段階の十七世紀半ばまで遡って、十七世紀後半期に展開された薩摩藩農政やその下での薩摩藩社会の動向について少し触れておく。

これまでの研究で明らかなどおり、十七世紀半ばの薩摩藩といえは、その財政を取り巻く急激な環境の悪化を背景に、近世的な藩体制や藩政の確立を意図した藩当局によって、正保・慶安期頃（一六四〇年代）を境に従来の消極的な農政が改められて大きく転換をみせた時期である。すなわち、新しく始まった新農政の下、寛永期以来藩内各地に蓄積され

ていた広大な荒田畑の早急な再開発に力を尽くす一方、藩営の大規模な干拓や開墾という新田開発事業を起こし進めることによって新たに大量の耕地を確保し、あわせて藩の農政機構を整備・充実したり農民支配体制の再編・強化の政策を強力に押し進めたりするなど、積極的な農村施策をつぎつぎと実施して、藩取分の農民年貢量を大きく拡大させていつて藩財源の大幅拡充や強化の実現を目指すという、新しい農政が藩によって本格的に開始され推進されていった時期であった（桑波田興「外様藩藩政の展開―薩摩藩」『岩波講座日本歴史10』、尾口義男「薩摩藩の新田開発について」『鹿児島史学32』）。

#### b 新田開発事業の進展と人配政策の推進

このような積極的な新農政の開始と進展のもと、十七世紀半ば万治内検期（一五五七～五九）の頃までには寛永内検期（一六三二～三四）に一万町歩ほどもあったことが推定される薩摩藩の荒田畑はほぼ再開発されて解消される一方で（尾口、前掲）、他方では明暦・万治期頃（一六五〇年代）から精力的に推進された藩営の大規模新田開発によって、ほとんど同世紀後半期には新しい耕地が大量に藩内各地につきつぎに生まれてくることになった。ちなみに万治内検期から享保内検期（一七二二～二七）までに出現した新開田畑は面積にして一万八七八八町歩（石高で一・一万一六六八石）もの巨額に及んでいる（「大御支配次第帳」）。

大規模新田が相次いで出現してくると、その経営と発展をはかるために藩によって多くの新田村落が各地に創出・設定されて生まれることになった。多数の新田村落がつぎつぎに出現してくるようになると、その新開村の維持経営や発展をはかるための主体として大量の農民労働力の

確保やそれら農民の新開地への移植等の事業も、並行して必然的に藩にとって不可欠・重要な事業となっていた。

「大御支配次第帳」や「三州御治世要覧三十六(御分国之巻)」(東京大学史料編纂所蔵「島津家文書」、『鹿児島県史史料集25 三州御治世要覧』)

によれば、万治期から享保内検に至る時期、三州本領域の各地で新村の創出事例や旧村の分割設置や合併等、領内農村の再編事例を数多く見出すことができ、この時期、薩摩藩三州領内の村落数は大きく増加していった様子などがうかがうことができる。

また万治元年(一六五八)十一月二十九日の家老島津正昭・新納久詮連名通達や享保内検時の家老種子島久基が同七年(一七二二)に出した通達によると、薩摩藩領内では万治内検期間中から、人口豊富な地域から鬪取りで農民を選抜して耕作者不在や人口稀薄な地域へ強制的に移住させて農村の経営にあたらせる、いわゆる人配(強制的な農民移し)政策が本格的に開始されたことが理解される(『薩摩日田賦雑帳』・「大御支配次第帳」)。そのような開発間もない新田村や耕作民不在の村々への藩による積極的な人配は、寛文四年(一六六四)の藩主島津光久直々の袖判署名入りの通達ほか当時の多くの農政関係史料によれば、万治内検後の十七世紀後半期にも引き続き盛んに実施されていったことも知られる。

薩摩藩社会で人口が爆発的に急増し始めて進展していった十七世紀後半の末から十八世紀前半期にかけての時代は、その少し前(十七世紀半ば)に藩の積極的指導のもとに始まった大規模新田の開発事業が最盛期を迎えていた時期で、藩内には広大な新開の田地が次々に出現し、その維持・経営のために多くの新村が各地に次々に創られ、新田村はもとより耕作人不足の村の経営のために多くの農民労働力の確保が藩には必要

とされることになって、そのことを全領規模で円滑ならしめるために藩による人配政策が本格的に始まり盛んに推進されていった時代でもあった。

### c 人口の爆発的急増の要因と歴史的背景

前項までの事実確認を踏まえて、新田開発政策の推進を通して新たに出現してくる大量の耕地及び多数の新田村の有する社会的な意味について考えてみたい。指摘するまでもないが、それまでの社会には存在していなかった村が新しく多数出現し、その後、それを維持・経営していく努力が体制的に強く求められる社会や時代が到来すれば、その社会にはそれまでにはない多数の農民労働力の存在が必要とされるようになる。新田開発事業の進展と隆盛は、そのような農民労働力に対する社会的需要をどんどん高めていく役割を果たす性格のものといえる。

また、十七世紀半ばの新しい積極農政への転換を機に、その後薩摩藩が推進した新田開発政策によって大量の耕地を確保して米穀類の飛躍的増産を実現し、ひいては藩収取分の農民年貢量の大幅拡大の実現を企図した農政は、その性格上、豊富な農民労働力の存在を前提とするか、政策の進展のペースや事業進度に沿って必要とされる農民労働力を十分に供給し続けられる社会でないと、その事業目的を達することができない性格をもつ政策である。すなわち領外から移入人口がほとんどなくしかも領内の農民人口の絶対数が固定化したような状態(人口停滞状態)の社会にあつては、新田開発事業がどんどん進展して新開耕地や新村が大きく増え続けていった場合、藩が領内の限りある農民労働力を人配等でどんなにやりくりして対応したとしても、早晚農民の人手不足を大きく

きたして事業は行き詰まり、藩の政策運営や事業展開上極めて困る事態に陥っていくことは、誰しも当初から容易に予想がつくことである。

十七世紀半ばに始まる薩摩藩の新田開発事業の進展そのものが、本来的にそのような性格と問題をはらみ、かつそれが事業推進主体者の藩当局に当初から十分に把握・認識されていたとすれば、新田開発事業の推進と並行して需要が大きく高まってくるのが予想される開発耕地の経営にあたる農民労働力の確保と創出という人口問題は、その政策や事業の開始当初から藩当局の重大関心事であったことは容易に察しのつくところである。とするならば、薩摩藩領内で新田開発政策が本格的に採用され事業が精力的に推進された十七世紀半ばから後半期にかけては、それと期を一にして農民人口の積極的な増加政策が藩によって採用され、その後それは藩の政策として長期にわたって推進され続けていったであろうことも容易に推測できるところである。

十七世紀の終わり頃から翌世紀の前期にかけて薩摩藩人口が爆発的に急増した背景には、当時の新田開発政策と連動して一体的な関係で推進された農民人口の増加政策という、同期の薩摩藩の積極的な人口政策があつて、それが同藩の人口急増をもたらした主要因の一つとなつていることはほぼ間違いない事実として推測できる。

さらにもうひとつ、新田がどんどん開発されて耕地が増大していくと、それにともなつて農業生産量(米穀類の収穫量)も大きく増大していくことになる。農業生産量が高まっていけばそれにともなつて社会全体の人口保養力も大きく高まり、食料事情面からみれば従来よりは暮らしやすい社会環境も生まれてくることになる。そうなると藩の奨励し推進する人口増加政策は農民を中心とした領民にとつても受け入れられやすい

性格のものとなり、従来よりは家族数が増える要因を高めることになる。

このような経緯の中で新田開発を契機に急速に高まっていた薩摩藩社会の人口保養力がまた、十七世紀末以降の同藩三州本領域部における人口の爆発的な急増をもたらした一大要因となつたことを推測することも難くないであろう。

## 2 日向国諸県郡域の近世中・後期の人口停滞の背景

前節でも指摘したところであるが、前掲第2表をみれば明らかなように、日向国諸県郡(現宮崎県)の近世前期の人口は、一時的にはかなり落ち込んだ時期もあるが、十七世紀を通じてはおおむね六万人前後に停滞的に推移した後、ほかの薩摩藩領と同じく同世紀末以降の人口急増現象によつて同地域の人口は大きく伸び、十八世紀前期の享保内検期(一七二二―二六)には八万人台半ば位にまで達していたことを推測できる。しかしながら同世紀の中・後期にかけてのある時期を境に諸県郡人口は減少に転じて大きく後退し、やがて七万人台半ばでの停滞的状态に陥り、それは廢藩置県の行われた明治初期まで続いている。

開発可能な広大な原野に恵まれながら、近世後期に人口増加を拒み続け停滞的に推移した諸県郡地方の人口動態の背景には何があつたのか。

近世中期以降の諸方郡の人口の落ち込みと停滞的状态のことについては、享保初期に霧島山中の新燃岳がくり返し起こした大規模な噴火活動のことを抜きにしては理解できない。

### a 享保の霧島山噴火の起こり

享保年間におこつた霧島の新燃岳の噴火活動とは、日向国諸県郡地方

にとつてどんな意味をもつ出来事だったか。また何をもたらした出来事だったのだろうか。先ず、この噴火の起こりからみておきたい。

享保元年（一七一六）閏二月十八日に噴煙を上げ始めた霧島山中の新燃岳は、八月十一日の噴火を経て、九月二十六日夜半から翌二十七日にかけて一回目の大規模な噴火をおこした。それは翌十月の二日・四日・九日・十日、及び二十一日から二十三日にもくり返しおこり、火口に近い山中や山麓部の集落に被害をもたらし、山林各地で大きな火災も引き起こした（陽明文庫所蔵「享保元年十一月薩摩藩届寛」・「三州御治世要覧」・鹿兒島大学附属図書館所蔵「古記 上」『鹿兒島市史Ⅲ 史料編』・宮崎県高原油水浜家所蔵「高原所系図巻冊」）。

例えば高原郷（現宮崎県高原町）の場合、「三州御治世要覧」や「高原所系図巻冊」によれば、山中の瀬戸尾権現社に参詣中の福山郷の者四人と花堂暖所の飛脚一人が噴石で死亡したほか、発生した山林火災によって蒲牟田村山中の祓川集落や花堂町が全焼し、狭野神徳院・東御在所社頭などの人家にも被害が出たことが知られる。また風下の郷村では噴石や降灰による被害もおびただしく、この時の噴火の被災状況を藩に報告した内容を書き留めた箇所には、霧島山からかなり離れた山之口郷（同山之口町）での計量結果として、一步（約三・三平方メートル）当たり六斗四升もの膨大量の砂石が降り積もったとする記事もみえる。

この噴火による被災状況を京都近衛家に知らせた藩の届書（「享保元年十一月薩摩藩届寛」）は、この九月から十月にかけての噴火活動で、霧島山中の堂社一字・寺二か所ほか寺社・門前家など人家一四三軒が焼け、降り積もった噴石や火山灰によって高二万八二〇〇石余の田畑が砂入の被害を受け、紉・雑穀二二三七石余が失なわれ、死者五人・死牛馬五疋

と人畜にも少なからぬ被害が出たことを留めている。

#### b あいつぐ大噴火と諸県郡の郷村

これだけでは噴火は鎮まらなかった。その後大きな噴火がくり返され、諸県郡地方の被害は広範に及び拡大していった。以下、その経緯を示す。九月末から翌十月にかけて活発な噴火活動をみせた新燃岳は、その後一時鎮まっていたものの、年末には再び活動を始め、十二月二十六日から二十九日まで大きな噴火が続いた。なかでも二十八日・二十九日の噴火は規模が大きく、大量に噴き上げられた火山灰は折からの季節風に乗って、高原・高崎・都城・小林・須木・野尻・倉岡・綾・穆佐・高岡など、諸県郡地方の大半の郷村に大量に降り積もって田畑を埋め尽くした。そして高原郷花堂の郷士屋敷の全部及び高崎郷の宇賀大明神・海蔵寺等が焼失したほか、都城郷の片添村なども燃えて、山中の堂社や人家・牛馬・森林ほか、噴火による火災の被害もさらに拡大していった（『鹿兒島県史料 旧記雑録追録三』・「三州御治世要覧」・「高原所系図巻冊」）。

噴火活動は年が明けても止まず、翌二年（一七一七）正月三日にはまたまた大規模な噴火がおこり、高原郷の入来や石ヶ野・川平名集落の大半と高崎郷の麓の一部が焼失した。この後も、七日、八日、十日、十一日から十二日にかけてと、続けざまに大きな噴火がおこった。特に七日の昼間八つ時（午後二時頃）過ぎに始まった噴火は、「古記」や「三州御治世要覧」によれば、噴火による火光を鹿兒島城下からも見ることができ、翌八日夜の五つ時分（午後七時頃）から始まった噴火は、夜が更けて晩になるほど空は晴れたように明るい夜となるほどだったという。

火口直下の東麓方向に広がる高原郷は、この正月にあいこいだ噴火に



ともなつて降り注いだ炎熱の噴石や流れ出た溶岩等によつて各地が大き  
な火災に見舞われ、名刹錫杖院ほか多くの堂社や人家がごとごとく焼失  
してしまつた。また激しく降り続いた大量の砂石によつて高原・高崎両  
郷内での居住は困難となつて、両郷民は危難を避けて全員が立ち退きを  
余儀なくされ、勝岡・都城・松山・野尻・小林・飯野・加久藤などの諸  
郷各地に避難し、監視の役人がわずかに残るだけの事態となつた。さら  
に正月七日の噴火では再び大量の噴石や火山灰が噴き上げられ、高原・  
高崎・野尻・高城・山之口・都城等の郷村に広く降り積もつた。それは  
前回より量こそ少なかつたものの、それでも厚さが七、八寸(約二一、  
二四センチ)から一尺(約三〇センチ)にも及んだ所もあり、藩役人が  
山之口郷で測つてみると、一歩当たり一斗三升ほどもあつたという  
(「古記 上」・「三州御治世要覽」・「高原所系図巻冊」)。

人畜・家屋・山林などの被害は、前年の九月と十二月の噴火時に比べ  
てはるかに大きかつた。正月の噴火による被害の特に大きかつた高原・  
高崎両郷ほか、前年秋から多量の降灰禍に襲われた多くの諸県郡の郷村  
一帯ではその秋から翌春にかけての畑作物の収穫ができなかつたばかり  
か、植え付けも全くできない状態に陥つた(「古記 上」・「三州御治世  
要覽」・陽明文庫所蔵「享保二年三月薩摩藩届寛」)。

「古記 上」や「享保二年三月薩摩藩届寛」によれば、正月十二日の  
大噴火を最後に以降は新燃岳の火山活動は鎮静化に向かつたことがうか  
がえるが、「三州御治世要覽」等によれば、その一年後の享保三年(一  
七二八)二月二十七日、新燃岳はまた大噴火をおこして、高原郷や高崎  
郷は降石や降灰による被害を蒙つてゐることがわかる。

霧島新燃岳の噴火活動が鎮静化した後も、諸県郡地方の領民がその終

息を確かなものとして実感として体感し、安心して平常の生活ができる  
ようになるまでには、その後長い年月を要したことが推察される。

#### c 噴火活動で受けた諸県郡地方の被害

享保元年(一七一六)から翌二年にかけての霧島新燃岳の噴火活動に  
よつて諸県郡地方にはどれくらい被害が出たのであろうか。

「古記」には、薩摩藩の検分役人が享保二年(一七一七)一月十一日  
時点で行つた本格的な霧島噴火活動が始まつた前年秋以降の被害状況調  
査の結果を示した記事を載せる。これによれば、噴石や降灰によつて大  
きな被害を受けた外城(郷)一二か所、火災による焼失家屋六〇四軒、  
焼死牛馬四百五匹、怪我人三三人、耕作不能の損地となつた田畑六二四  
〇町歩余、その高(損高)六万六一八二石余に及んでゐる。

この損地・損高となつた耕作不能分の田畑の規模は、当時の諸県郡の  
田畑総面積のどれくらいを占めたのだろうか。

薩摩藩が、享保六年(一七二一)十二月時点で薩摩国・大隅国・日向  
国諸県郡それぞれの地域別の本田畑面積ほか新田・新田見取場の田畑面  
積、及び百姓ほか農村部居住の農業労働従事人口等を調べて幕府に提出  
した「享保六年十二月十六日 一薩摩大隅日向諸県郡御領内田畑町歩  
男女人数公義江書上候帳面写一冊」(東京大学史料編纂所所蔵)という史  
料がある。これによれば、霧島山噴火直後の享保六年当時の諸県郡の田  
畑総面積は一万五九〇三町歩余であつた。また総石高(内高)は、藤井  
本「要用集抄」(鹿児島県入来町藤井家所蔵)によると噴火直前の正徳三  
年(一七一二)頃で高一五万二五二九石余、「大御支配次第帳」によれ  
ば噴火直後の享保内検期(一七二二―二七)で高一五万七六六一石余で

あった。

享保初期の霧島山の噴火活動で耕作不能となった日向国諸県郡の田畑の被害総額は、前掲のとおり損地六二四〇町歩余・損高六万六一八二石余であった。この噴火活動による被害を蒙って耕作不能となった田畑は、面積・石高双方からみて、当時の諸県郡の耕地全体の約四割もの巨額に及んだことが理解される。

また「三州御治世要覧」や「享保二年三月薩摩藩届覚」によれば、噴火の直接の被害は免れたものの、噴火活動を原因とした地殻変動によって、霧島山系から流れ出る河川の中には水量や水勢が極端に減って農業用水の確保が困難になったり、大量の硫黄分が流出して稲作には一時不適となった川もあったことがうかがえる。

享保初期の霧島新燃岳の噴火活動が諸県郡地方に与えた被害は甚大であった。

#### d 深刻な噴火活動の後遺症

諸県郡に住む薩摩藩領民の受けたダメージは一定期間の噴火活動にともなう直接的な被害のみには止まらなかった。その後、同地方は噴火に因や端を発するさまざまな後遺症に苦しめられることになった。

前述したように、霧島山の噴火活動は、諸県郡地方の作付中の農作物や田畑など農業に甚大な被害をもたらし、領民たちの生活に大きな打撃を与えた。なかでも同地方に広範かつ大量に降り積もった火山灰は、やがて多くが土中に混入して土壌の酸性化をもたらし、土地生産力（農業生産力）を急速に低下させていった。「年代記」（都城島津家所蔵）等によれば、これらの酸性化した田畑が自然の浄化力によって回復していく

には、その後長い時を待たねばならなかったことが理解される。

ところで被災地の復旧活動のことであるが、これは噴火活動が鎮静化した直後から始められた。「高原所系図巻冊」によれば、高原郷では二月十二日、高崎郷では三月二日から、藩役人（檢者衆）の指導監督のもとに現地農民と近郷農村から徴発した人夫（加勢夫）をもって復旧作業に着手している。しかしながら作業は遅々として進んでいない。

例えば最大の噴火被害を受けた高原郷の場合、後川内村のわずかに二七町四反五畝余の耕地（田地一三町二反八畝七歩・畠地一四町一反六畝二七歩）の噴石や降灰を除去（砂上げ）して田に回復させるのに、大変な労働力の確保と作業を強いられている。すなわち前掲二七町歩余の耕地を復旧するのに延人数で三二〇二人半の人夫を要し、うち復旧の手伝いのために近郷の農村から加勢夫として徴発された人夫は二六五三人（財部一〇二四人、馬越一九〇人、真幸・吉田一八一人など）もの大量に及んでいる。

甚大な噴火被害を蒙った高原・高崎両郷はもとより、田島等への砂入り（降灰）被害を大きく受けたほかの多くの諸郷でも、その復旧には、いずれも長期にわたって、莫大な農民労働力の投入が必要とされたことが推測される。

「高原所系図巻冊」には、三月十三日になると、現地の農民や高原郷士たちによる「自分砂上」の願いが出され、自分持ちの田畑の自力復興作業も本格化したことも記すが、この種の復旧作業では、現地麓の特権層の上級郷士たちが農民の田畑よりも自分持ちの田畑の復旧を優先させて、盛んに農民の夫役徴発を行った郷があったことも知られている。

そして「三州御治世要覧」によれば、享保六年閏七月三日から八日に

かけて、噴火被害の傷が充分に癒えない諸県郡地方を昼夜間断なく豪雨が襲った。これにより発生した大洪水で、霧島山の山間部に堆積されていた火山噴出物が土石流となつて大量に流れ出し、高原郷から高崎・高岡・野尻郷一帯にかけて大きな災害が発生し、多数の死者が出ている。

#### e 生活環境の激変と近世中・後期の諸県郡の人口

享保初期にくり返された霧島新燃岳の大噴火以降、諸県郡地方の多くの郷村は、領民たちが生活の根幹を支えてくれる農業をするにしてもふつうの共同体生活を営むにしても、従前とはとりまく環境が著しく悪化することになった。このような農業や生活環境の激変に、霧島山が大噴火活動を通して見せつけたすさまじいまでの大自然のもつ脅威（神威）への強烈な畏怖心も加わつて、人が普通に住み生活するにしても、家族や集落単位の共同体生活を発展させるにしても、また他所から新たに入植して定住していくにしても、噴火後の諸県郡地方の居住・生活環境は、噴火前と比べるとはるかに暮らしくくて人を惹きつけるものに乏しい、そして安心して住めない、魅力が大きく減退した風土や自然環境に急激に変質していったことが推測される。

ところで火山の大噴火にともなう大量の降灰の被災地一帯が、その後にもたらされた土壌酸性化による後遺症の影響を受けて農業生産量を大きく落とし、おりから進行中の飢饉をも一層深刻なものにして、ひいてはそのことが大幅な人口減少を引きおこす一大要因となつてしまった日本史上の有名な事例として、天明三年（一七八三）の浅間山噴火による北関東から東北地方にかけての被災事例がよく知られている（速水融

『歴史人口学の世界』）。

先に近世の薩摩藩領の人口動態の特徴について言及した際に、諸県郡地方の人口が十七世紀末から十八世紀前期にかけては他の薩摩藩領域と同じように大きく増加傾向をみせていたのに、享保年間から間もなくして十八世紀中頃には一転減少に転じて大きく落ち込み、それ以降は明治に至るまで長らく七万人台半ばに停滞的に推移したという歴史事実を指摘したが、この事実を重ねて本節でみた享保の霧島新燃岳の噴火を因として諸県郡地方でおこつたさまざまな出来事のことを、天明の浅間山噴火の事例に照らし考えてみると、十八世紀中頃の人口の大きな落ち込みとその後の長い停滞的状态という同地方特有の人口動態が、享保初期に霧島新燃岳でくり返された大噴火で同地方が蒙つた甚大な被害とその後遺症、すなわち新燃岳の噴火活動に端を発して急激に進行した農業環境や居住・社会生活環境等の悪化、及び大量の降灰による土壌酸性化が引き起こした農業生産力の大幅減衰にともなう同地方の社会的人口保養力の低下等、といった近世中期の同地方に特有の歴史的事情に極めて大きく影響されてもたらされたものであったということを推測することは難くないであろう。

#### 六 結び―人口動態からみた薩藩史研究上の問題（補論4）

前節で、近世の薩摩藩の人口動態のもつ大きな特徴のうち、十七世紀末頃から翌十八世紀前半にかけて薩摩藩で起こった爆発的な人口急増現象と、その後の日向国諸県郡地方における人口の大きな落ち込みと長らく続いた人口停滞状態という二例を取り上げ、その特徴ある人口動態の

背後に、これまでの薩摩藩の歴史研究では見過ごされ知られていなかった重要な歴史事実が潜んでいたことを明らかにした。

このことは第二論文「薩摩藩研究上の人口動態からみた諸問題」でも取り上げたところでもあるが、最後に、本稿の考察やこれまでの研究を通して、今後の薩摩藩の歴史研究を進めるうえで人口動態面からみて留意しておかなければならない問題として筆者が感じている事がらを、前稿を補っていくつか列挙して結びとする。

#### 1 人口動態の時代的特徴に配慮した研究の重要性

第一に、人口動態面の時代的特徴に配慮した薩摩藩史の研究や歴史認識が望まれるということである。第四節でみたように、薩摩藩の人口は江戸時代を通じて一定の平均的なペースで増加したものではない。藩政期に増えた人口の大半は中・後期の人口停滞期を挟んだ前後の二度の人口急増期に爆発的に増えてもたらされたものである。そのうち第一期分の爆発的増加は、新田開発政策の推進により生まれた人口保養力の増大や同期の積極的な人口増加政策を主因にして出現したことが推測される。このような同藩の人口動態のもつ時代的特徴や時代特有の社会状況を十分に考慮した歴史理解や、それらの背後に潜む歴史事実へ十分に意を払った薩摩藩史研究が望まれている。

#### 2 人口動態の地域的特徴を踏まえた研究の重要性

第二に、人口動態面の地域的特性（地域格差）に配慮した理解や研究が望まれるということである。江戸時代における薩摩国・大隅国・日向諸県郡・道之島・琉球国の人口増加のあり方や動きは一様ではない。近

世前期はともかく、十八世紀半ば以降は極めて地域間の格差が大きい。この地域的な特性（個性）をよく踏まえ、それに配慮した薩摩藩の歴史理解や研究のあり方が望まれているということである。

#### 3 地域的特性の背後に隠れた歴史事実の究明の大切さ

第三に、第五節でみたように、この地域特性の背後にはその時代その地域なりに特有の重要な歴史事情や歴史展開がそれぞれに必ずある。

人口の地域特性の背後に潜み、特に近世中期以降の顕著な地域格差をもたらししている各種の歴史的要因を究明し、それを踏まえた固有の歴史展開を解明して、それらの新たな歴史情報を付加した新しい薩摩藩の近世社会史像を構築していくことが求められている。

#### 4 それぞれの身分階層が社会的・歴史的に果たした役割

や占めた比重の究明の大切さ

第四に、江戸時代に薩摩藩の武士人口が高率で町人人口が寡少であったということはよく知られているが、農民人口の比率の異常に低かった一方で、浦浜・浦町など海辺集落に住む浦浜人身分者の人口比率は極めて高かったという歴史事実には、これまで研究者の目や関心はほとんど注がれてこなかった。第四節でみたように、薩摩藩の百姓身分者の人口は、近世を通じて多いときでも全体の五割を少し超える程度で、全国の諸大名領や幕府領のどこと比べても非常に比率が小さく、浦浜人身分者の人口は、近世前期から常時一割に迫るほど非常に高率を維持している。この百姓身分者の人口が極めて少なく、一方で浦浜人身分者の人口が非常に多かったという薩摩藩特有の封建社会のもつ意味と事の重大性に

ついてもつと意を払い深く考究してみる必要性がある。すなわち旧来の薩摩藩史研究において説かれ形成されてきた薩摩藩社会のそれぞれの身分階層に対する常識的な歴史認識を問い直し、百姓・浦浜人の両身分人口はもとより武士や町人身分者まで含めたそれぞれの身分階層人口が近世の薩摩藩で果たした社会的・歴史的な役割と占めた比重について改めてもつと深く多面的に考察してみる必要がある。

#### 5 郷村史研究における硬直した常識的・画一的な人口イメージからの脱却の必要性

第五に、近世中期以降の郷村単位の研究においては、旧来の常識的・画一的な薩摩藩領域の人口イメージから解放された研究や理解が求められている。近世後期の薩摩藩領に対しては、人口の増加・過剰状態の西目（薩摩半島域）に対して停滞・寡少状態の東目（藩領東北部の大隅・日向地域）という歴史認識が一般に形成されているが、これはあくまでも一般的な傾向であつて、この理解をもつて個々の郷や村をみつめ歴史認識をつくり研究を進めることは極めて危険である。個々の郷や村単位でみていくと、例外的事例が数多あるからである。それぞれの郷や村特有の人口動態の個性的展開を把握した上での郷村史研究が求められる。

#### 6 人口的に男子優勢社会の研究の必要性

第六に、近世前期の薩摩藩三州本領域では全体人口に占める男子比率約六割・女子約四割という圧倒的に男子人口の優勢な社会が続いたことを指摘した。このような男子優勢社会はどんな構造と体質をもつた社会

だったのだろうか。また何がこのような人口構成の社会を生み出したのか。近世前期の人口面からみた男子優勢社会のもつ意味について考え、その具体的な社会の質や構造を明らかにする必要がある。

#### 7 男子優勢社会を地域的・時代的に広げて考察してみることの重要性

第七に、このような男子人口優勢社会は、地域的にみて近世前半期の薩摩藩の三州本領域社会に特有のものであったのか。それとも薩摩藩以外の近隣の九州や西日本の諸藩領や幕府領にも共通して広がりをもつ性格のものであったのか。また時期的にみて、戦国末及びそれ以前の中世社会にまでさかのぼる性格のものであったのか。

もし地域的に薩摩藩領以外にも普遍的に広がり、時代的にも近世以前にまでさかのぼるといふことであれば、ことは日本史的な論議が必要な問題として重大である。九州・西日本諸藩領のいっそうの人口研究も求められている。

#### 8 男子優勢社会から男女均衡型社会への移行のもつ歴史的意味の究明の必要性

第八、三州本領域では、近世前半期の男子優勢社会は後期から幕末にかけて男女人口のほぼ均衡する社会へと移行していく。何がこのような変質をもたらしているのか、この変質のもつ歴史的意味を問う必要性も感じる。

## 9 道之島と琉球国のいち早い男女均衡型社会出現の背景 の究明の大切さ

第九に、男女の人口比率からみた道之島と琉球国の異質性の意味や示すものを明らかにする必要がある。この両地域は三州本領域とは様相を大きく異にして、琉球国は近世初期から、道之島では近世前期末の十八世紀初頭には、男女人口の比率格差が極めて小さい男女均衡型社会が出現していることが確認される（琉球国は近世初期から女子が男子を若干上回る状態で人口が推移している）。人口的にみれば近世前半期の両地域は同時代にあつて三州本領域とは明らかに異質な社会といえる。三州本領域にいち早く先駆けて、道之島や琉球国に何がこのような男女均衡型社会をもたらしているのか。三州本領域の近世前半期の男子優勢社会に対する研究や考察を深める上からも道之島と琉球国の人口研究を深めることも求められている。

### 【後記】

本稿は、平成十一年三月二十七日に尚古集成館の文化講座（鹿児島市仙巖園秀成荘）で話した「人口動態からみた薩摩藩社会」、及び同年四月十七日に鹿児島歴史研究会（歴史資料センター黎明館）で行った発表「人口動態からみた薩摩藩研究上の諸問題」のそれぞれの一部、並びに「鹿児島史学第45号」（鹿児島県高等学校歴史部会編）に最近発表した「薩摩藩研究上の人口動態からみた諸問題」をベースにして作成した。

本稿作成にあたっては、松下志朗氏（福岡大学教授）・原口泉氏（鹿児島大

学教授）・前床重治（県立大島高等学校長）・有坂道子氏（京都大学）・徳永和喜氏（黎明館主任学芸専門員）等より貴重な史料の提供を受けた。末尾ながら、記して厚く御礼の意を表したい。

ところで、本文でも述べたが、先に本誌に発表した「薩摩藩の人口」（黎明館調査研究報告11）の発表の後、筆者は前稿には若干の考察の不足や資料提示上の不備があることに気づいた。したがって従来の考察や指摘、及び提示のデータの一部を次のように改めさせていただきたい。

### 1 享保内検期（一七三二～一七三七）の琉球国人口と薩摩藩総人口

について

享保期の琉球国人口の記述を留める「薩摩例規雑集」の存在を知らずして発表した前稿では、宝永期の同国人口に比較した場合の享保内検期の「大御支配次第帳」の人口データに不可解の念を抱きながらも、本文中で同期の琉球国人口として一三万人前後から一四万人台の存在は推定できるとして、これにその他の薩摩藩四領域の人口を加えた総人口を約七十五万人から七十六万人と推定できるとし、その推定値を第19表「鹿児島藩の国・島嶼別人口推移」にも掲げたが、これらをいずれも撤回して、「薩摩例規雑集」や「沖繩市史」・「近世沖繩の素顔」（田名真之）等により知られるデータに基づいて、享保内検期の琉球国人口は一六万人台後半から十七万人台、同国を含む薩摩藩総人口は約七八万人から七九万人位と推定されると訂正させていただきたい。

### 2 明和九年（一七七二）の道之島と琉球国の人口について

前稿の第19表では、明和九年の道之島と琉球国の一般集計分人口にその除外分人口（行脚・乞食など）を合わせた人口を前者七万四八九九人・後者一七万四二二二人としているが、これには集計処理上のミスから道之島の除外分一人を琉球国分に混入させている。したがって改めて明和九年の一般集計除外分を含めた道之島人口は七万四九一〇人、同じく琉球国人口は一七万四二二一人

と訂正させていただきたい（典拠、『鹿児島県史 第二巻』に収める明和九年「要用集抄」の人口データ）。

### 3 明治四年（一八七二）頃の大隅国・日向国諸郡、及び三州本領域の人口について

前稿では明治四年の薩摩藩三州領域の人口を掲げるにあたり、筆者の資料作成の不備や校正上のミスから明治初期に一時期日向国所屬となっていた末吉郷（もと大隅国所屬）の人口八五八七人分を欠落させている。したがって前稿で明治四年頃の七五万人台と推定していた三州人口を、末吉郷分を考慮に入れて七六万人台と訂正させていただきたい。なお、これとその他の若干の揭示データの不備を正すために、前稿第17表「鹿児島藩の郷別・男女別人口」と第18表「鹿児島藩の郷別・身分別人口」を、それぞれ本稿の第6表と第7表のとおりさしかえさせていただきたい。

なお、江戸時代を通じて大隅国に所屬して明治四年当時には日向国に所屬していた末吉郷の人口については、前代のデータとの比較や利用の便益上、薩摩藩領の三州内訳人口を掲げた第2表、及び同年の大隅国と日向諸郡の人口を掲げた第6表と第7表においては、いずれも日向国分から抜いて大隅国分に加えて示している。

### 4 第二論文に掲げた延宝五年（一六七七）の三州本領域の人口について

筆者は最近発表した第二論文で京都大学文学部所蔵の「古文書集六」中の「延宝五年丁巳年札改薩隅日人数一紙目録」に収められた薩摩藩人口データの一部を紹介したが、その際、延宝五年（一六七七）の薩隅日三州本領域部の全人口を同年の宗門手札改の際に一般集計分として計上された三七万九一四二人のみの数値をもって全人口として掲げ、慶賀・行脚・死苦・乞食等の除外人口分一〇八一人を欠落させる過失を犯している。したがって、この両人口を合算し

た三八万〇二三人をもって延宝五年段階の薩摩藩三州全人口と改めて訂正させていただきたい。

### 【参考】

本稿の第五節「日向国諸郡地域の近世中・後期の人口停滞の背景」の論述の典拠として用いた享保初期の霧島山噴火関係史料のうち、これまで一般にはあまり知られていない鹿児島大学附属図書館所蔵の「古記 下」（A）、及び財団法人陽明文庫所蔵の新史料三点（B）の記事全文を掲げる。

#### A、「古記 下」の享保二年の項に収める霧島山噴火関係記事

正月七日、雪、今日より廿一日迄霧島時々大焼、七日昼八ツ過時分に成候得者、鹿府より火光見ゆる、同八日夜五ツ時分神火夥敷、其晩に成程晴夜、同十日昼四ツ時分より同十一日九ツ時分より大焼、砂石はうすく、一時二時計ツ、間有之、宍時半時半時、焼候、正月七日降砂石、山之口にて例見、此中よりハうすく一步に一斗三升計にて候由、今度砂降候外城、高原・高崎・野尻之内、高城・山之口・都城之内也、

今度高原・高崎表、霧島度々大焼二付、為見分御目付横目被遣置候処、正月十七日帰宅二而首尾被申出候、後表高原・高崎、衆中・百姓皆共に岸有之所ハ元ヲ拵、岸無之所者庭を掘、大竹を以塩屋之様に拵、上者茅を露、其上に野柴を打掛置候、野山道江者大小之石落候而、少々之焼者不絶有之、砂降世間曇天二而道を行候時も半首をかむる、就中高原之内二而も花堂之在所志宇も不残焼払、大木立ながら枝を打落し、怪我人数多、牛馬之飼料も近外城より入付候、絶言語候事之由被申候、依之右片付方として大御目付吉岡右京殿・御用人谷山角太夫殿・高原地頭左近允与太夫殿、其外地頭之衆・御目付・横目被差遣候、当正月十一日御改、

#### 一 砂入外城拾式所

一 焼失家六百四軒 一 焼牛馬四百五疋

- 一怪我人三拾三人
- 一田畠六千式百四拾町八反六畦拾六歩
- 一高にして六万六千八百八拾式石余損地二相成、

B、陽明文庫所蔵の霧島山噴火關係史料の記事

1 「享保元年十一月薩摩藩届覚（近衛家宛）」

松平薩摩守領国大隅国之内霧島山不絶少々相燃候所有之候処、申九月廿六日夜大分燃出、其辺焼失損失覚、

- 一堂社十一宇 焼失
- 一寺二ヶ寺 右同
- 一寺社之門前并町家数百四拾三軒 右同
- 一蔵一 右同
- 一米百三石余 右同
- 一高式万八千式百石余 砂入
- 一粉千六百七拾石余 損失
- 一雜穀五百六拾七石 右同
- 一死人五人
- 一死牛馬五疋
- 十一月

2 「享保二年三月薩摩藩届覚（近衛家宛）」

松平薩摩守領内大隅国之内霧島山、旧臘廿六日より当正月十二日迄度々燃候而、日向国諸県郡之内諸所焼失并損失之覚

- 一高四万七千九百五拾石余 石砂灰入
- 一米雜穀千五百四拾五石余
- 一堂社拾壹宇
- 一寺家三拾軒

3

「享保二年三月薩摩藩届（近衛家宛）」

一霧島山当正月十二日迄燃候所、于今煙絶不申、時々燃候得共、其後大燃者無御座候、

一日向国諸県郡之内高原・高崎与申所、燃之近郷二而御座候故、火石落申候付、家屋等悉致焼失、男女領国之内諸所江立退、役人之者纔計相残、岸杯二穴を掘、火石を除罷居候、勿論燃鎮り不申内者、立退候者共茂当分之体候得者、立帰候儀難成事候、右所者近方故遠方より砂灰少ク、大小之火石者大分落、田畠及損失候、近年中本之通田畠相開儀難成、尤当島作類一円無納罷成候、此外風下之儀ハ砂灰依所壹尺余、又者七八寸段々降積申候、右通候得ハ諸所之儀も大形島作及無納、仕付等茂難成由二御座候、

一霧島山より流出候川、此節之燃候付而、水勢十部壹程罷成候、此川水隅州之内専田地之用水二而御座候処、右通干損、其上硫磺水二罷成、魚類迄茂痛申候付、別而田地之障二罷成筈候、然共当分二而ハ何程之痛与申候儀ハ難計由二御座候、

右之通、此節申来候付、此段も申上置候、以上、

三月

- 一土并社家寺門前百姓家数六百四軒
- 一樅・梅・杉・赤松・岳杉・桧有之材木山八九里廻
- 一死人壹人
- 一但男
- 一怪我人三拾人
- 一死牛馬拾五疋
- 三月



第6表 薩摩藩の郷別・男女別人口 明治4年(1871)頃

1. 薩摩国

郷名	男子数 <比率>	女子数 <比率>	合計 <比率>	郷名	男子数 <比率>	女子数 <比率>	合計 <比率>
鹿児島	43,589 <51.0%>	41,842 <49.0%>	85,435 ※実際の集計値は 85,431 (100.0%)	黒木	467 <50.9%>	450 <49.1%>	917 <100.0%>
吉田	1,926 <50.2%>	1,911 <49.8%>	3,837 <100.0%>	山崎	2,099 <52.9%>	1,866 <47.1%>	3,965 <100.0%>
郡山	2,314 <51.1%>	2,213 <48.9%>	4,535 ※実際の集計値は 4,527 (100.0%)	大村	1,691 <50.7%>	1,644 <49.3%>	3,331 ※実際の集計値は 3,335 (100.0%)
伊集院	9,199 <50.7%>	8,939 <49.3%>	18,138 <100.0%>	蘭牟田	808 <52.6%>	729 <47.4%>	1,526 ※実際の集計値は 1,537 (100.0%)
永吉	2,266 <53.6%>	1,961 <46.4%>	4,227 <100.0%>	牛山 ※旧大口・ 山野・羽月 郷よりなる	4,596 <51.8%>	4,280 <48.2%>	8,880 ※実際の集計値は 8,876 (100.0%)
吉利	1,580 <51.5%>	1,487 <48.5%>	3,067 <100.0%>	鶴田	1,691 <51.4%>	1,598 <48.6%>	3,289 <100.0%>
串木野	8,111 <51.0%>	7,795 <49.0%>	15,906 <100.0%>	佐志	552 <46.1%>	646 <53.9%>	1,198 <100.0%>
日置	3,494 <50.8%>	3,225 <48.0%>	6,719 <100.0%>	出水	9,481 <51.0%>	9,110 <49.0%>	18,591 <100.0%>
市来	8,362 <50.8%>	8,089 <49.2%>	16,421 ※実際の集計値は 16,451 (100.0%)	長島	3,673 <51.3%>	3,486 <48.7%>	7,159 <100.0%>
入来	2,312 <50.9%>	2,232 <49.1%>	4,514 ※実際の集計値は 4,544 (100.0%)	高尾野	2,004 <50.2%>	1,989 <49.8%>	3,993 <100.0%>
樋脇	2,512 <50.1%>	2,500 <49.9%>	5,012 <100.0%>	野田	1,087 <52.4%>	988 <47.6%>	2,075 <100.0%>
永利	1,103 <50.8%>	1,070 <49.2%>	2,182 ※実際の集計値は 2,173 (100.0%)	阿久根	5,534 <51.2%>	5,284 <48.8%>	10,910 ※実際の集計値は 10,818 (100.0%)
平佐 ※樋脇の中・ 楠元・倉野 村が入る	2,086 <50.3%>	2,064 <49.3%>	4,150 <100.0%>	水引	4,171 <50.2%>	4,136 <49.8%>	8,307 <100.0%>
隈之城	3,117 <50.7%>	3,025 <49.3%>	6,142 <100.0%>	高城	4,434 <51.5%>	4,171 <48.5%>	8,605 <100.0%>
高江	1,291 <49.4%>	1,323 <50.6%>	2,614 <100.0%>	川辺	5,698 <49.8%>	5,749 <50.2%>	11,447 <100.0%>
東郷	(☆3,822) <50.3%>	(☆3,773) <49.7%>	(☆7,595) <100.0%>	勝目 ※旧山田郷 なり	1,661 <49.9%>	1,672 <50.1%>	3,333 <100.0%>
甌島	7,866 <52.0%>	7,261 <48.0%>	15,172 ※実際の集計値は 15,127 (100.0%)	加世田	15,887 <50.3%>	15,708 <49.7%>	31,595 <100.0%>
宮之城	4,385 <50.9%>	4,223 <49.1%>	8,608 <100.0%>	南方 ※旧鹿籠・ 坊泊・久志 秋目を合す	6,183 <50.9%>	5,972 <49.1%>	12,155 <100.0%>

郷名	男子数 <比率>	女子数 <比率>	合計 <比率>
穎娃	7,650 <48.9%>	7,996 <51.1%>	15,676 ※実際の集計値は 15,646 (100.0%)
阿多	2,824 <49.2%>	2,918 <50.8%>	5,747 ※実際の集計値は 5,742 (100.0%)
田布施	3,785 <50.9%>	3,647 <49.1%>	7,432 <100.0%>
伊作	6,078 <50.5%>	5,953 <49.5%>	12,025 ※実際の集計値は 12,031 <100.0%>
喜入	4,091 <49.4%>	4,185 <50.6%>	8,276 <100.0%>
知覧	6,617 <49.8%>	6,661 <50.2%>	13,278 <100.0%>
指宿	5,862 <50.6%>	5,726 <49.4%>	11,588 <100.0%>

郷名	男子数 <比率>	女子数 <比率>	合計 <比率>
山川	3,049 <48.5%>	3,240 <51.5%>	6,289 <100.0%>
今和泉	2,850 <50.1%>	2,835 <49.9%>	5,685 <100.0%>
谷山	10,594 <50.2%>	10,493 <49.8%>	21,087 <100.0%>
三島	312 <50.2%>	311 <49.8%>	623 <100.0%>
硫黄島	130	123	253
黒島	146	142	288
竹島	36	46	82
七島	367 <47.8%>	400 <52.2%>	767 <100.0%>
口之島	51	54	105
中蛇島	52	53	105
臥平島	35	33	68
諏訪之瀬島	34	38	72
悪石島	0	0	0
悪石島	57	61	118
宝島	138	161	299

[ 出典：『薩隅日地理纂考』(明治4年正月15日、鹿児島県教育会編) ]

- 注1. 本表は、近世中期以降の薩摩国所属の郷を抽出して作成してある。
2. 太字の数値は史料原文掲載の合計数値を示し、実際の集計値とは内訳として併記されている男・女各人口の実際の合計数値である。
3. 人口比率は各郷ごとに対比実際集計値で示してある。
4. 記載が欠落している東郷の人口については、参考までに明治10年代前半(1881年頃)のデータを収める『鹿児島県地誌』の数値を掲げた。
5. 表末参考の合計値は上記注4の東郷分の数値は含めていない。
6. 上記『鹿児島県地誌』に掲げる東郷人口は次のとおりである。

(参考) 東郷を除外した合計人口

東郷を除く 薩摩国人口	男子数	女子数	合計
	231,309 (50.7%)	225,003 (49.3%)	456,425 ※実際の集計値は 456,612 (100.0%)

☆明治初期の薩摩国推計人口(含、東郷)

薩摩国総人口	46万3千~4千位か	(100.0%)
(内訳) 男子	23万4千~5千人位か	(51%弱)
女子	22万8千~9千人位か	(49%強)

明治10年代前半(1881年頃)の東郷総人口  
<内訳>

7,595人(100.0%)

A. 男子人口

①士族男 1,324人  
②平民男 2,498人

計3,822人(50.3%)

B. 女子人口

③士族女 1,299人  
④平民女 2,474人

計3,773人(49.7%)

7. 嘉永5年の『要用集』と明治4年の『薩隅日地理纂考』に掲げる薩摩藩の人口数値に基づく、この20年間に薩摩国ではおよそ18%前後の人口増加があったことが推定される。その後の10年間にこれとほぼ同じ年増加率で東郷人口が増えたと仮定して明治4年段階の人口を算出すると約7,000人の数量が得られる。また当該期の東郷の男子と女子人口が明治10年代前半とほぼ同じ比率で存在していたと仮定してそれぞれの人口を算出すると、ともに3,500人前後の数量が得られる。これらの数量をベースにして藩政最末期(明治4年頃)の薩摩国の総人口及びその男女の内訳人口を推定すると、おおよそ上表最下段にしめたような推定人口を得ることができる。

## 2. 大隅国

郷名	男子数 〈比率〉	女子数 〈比率〉	合計 〈比率〉	郷名	男子数 〈比率〉	女子数 〈比率〉	合計 〈比率〉
帖佐	2,906 〈55.0%〉	2,381 〈45.0%〉	5,487 ※実際の集計値は 5,287 (100.0%)	吉松	1,194 〈49.9%〉	1,198 〈50.1%〉	2,352 ※実際の集計値は 2,392 (100.0%)
重富	1,975 〈53.1%〉	1,742 〈46.9%〉	3,717 〈100.0%〉	太良 ※本城・曾 木郷を合 せなる	2,514 〈51.3%〉	2,386 〈48.7%〉	4,900 〈100.0%〉
蒲生	3,081 〈52.3%〉	2,805 〈47.7%〉	5,886 〈100.0%〉	菱刈 ※湯之尾・合 馬郷を合 わせなる	1,430 〈51.3%〉	1,357 〈48.7%〉	2,787 〈100.0%〉
山田	1,705 〈52.6%〉	1,538 〈47.4%〉	3,243 〈100.0%〉	桜島	5,808 〈50.8%〉	5,621 〈49.2%〉	11,429 〈100.0%〉
溝辺	1,710 〈52.6%〉	1,538 〈47.4%〉	3,248 〈100.0%〉	牛根	2,287 〈53.0%〉	2,028 〈47.0%〉	4,328 ※実際の集計値は 4,315 (100.0%)
加治木	4,967 〈52.9%〉	4,419 〈47.1%〉	9,386 〈100.0%〉	垂水	5,946 〈52.4%〉	5,394 〈47.6%〉	11,340 〈100.0%〉
襲山 ※旧日当山・ 曾於郡郷 よりなる	3,444 〈55.2%〉	2,791 〈44.8%〉	6,195 ※実際の集計値は 6,235 (100.0%)	新城	932 〈52.8%〉	832 〈47.2%〉	1,764 〈100.0%〉
清水	2,234 〈58.7%〉	1,605 〈41.8%〉	3,839 〈100.0%〉	小根占	2,572 〈50.7%〉	2,497 〈49.3%〉	5,069 〈100.0%〉
敷根	1,275 〈54.7%〉	1,058 〈45.3%〉	2,333 〈100.0%〉	大根占	1,881 〈52.1%〉	1,733 〈47.9%〉	3,612 ※実際の集計値は 3,614 (100.0%)
福山	2,516 〈51.3%〉	2,387 〈48.6%〉	4,903 〈100.0%〉	田代	900 〈54.1%〉	765 〈45.9%〉	1,665 〈100.0%〉
財部	3,002 〈51.7%〉	2,803 〈48.3%〉	5,805 〈100.0%〉	佐多	2,194 〈49.6%〉	2,229 〈50.4%〉	4,423 〈100.0%〉
恒吉	1,409 〈52.5%〉	1,275 〈47.5%〉	2,684 〈100.0%〉	内之浦	1,550 〈53.3%〉	1,359 〈46.7%〉	2,909 〈100.0%〉
市成	1,029 〈51.3%〉	978 〈48.7%〉	2,007 〈100.0%〉	高山	3,497 〈52.2%〉	3,200 〈47.8%〉	6,697 〈100.0%〉
岩川 ※末吉の五 十町・中之 内村を割く	1,996 〈50.6%〉	1,946 〈49.4%〉	3,942 〈100.0%〉	串良	4,385 〈51.0%〉	4,206 〈49.0%〉	8,591 〈100.0%〉
国分	9,470 〈55.3%〉	7,666 〈44.7%〉	17,144 ※実際の集計値は 17,136 (100.0%)	鹿屋	3,457 〈52.1%〉	3,175 〈47.9%〉	6,635 ※実際の集計値は 6,632 (100.0%)
踊	2,012 〈52.6%〉	1,815 〈47.4%〉	3,826 ※実際の集計値は 3,827 (100.0%)	始羅	1,598 〈51.6%〉	1,497 〈48.4%〉	3,095 〈100.0%〉
横川	1,907 〈51.1%〉	1,826 〈48.9%〉	3,793 ※実際の集計値は 3,733 (100.0%)	大始良	2,268 〈51.8%〉	2,107 〈48.2%〉	4,385 ※実際の集計値は 4,375 (100.0%)
栗野	2,078 〈51.9%〉	1,929 〈48.1%〉	4,007 〈100.0%〉	花岡	1,515 〈53.4%〉	1,323 〈46.6%〉	2,845 ※実際の集計値は 2,838 (100.0%)

郷名	男子数 〈比率〉	女子数 〈比率〉	合計 〈比率〉
高隈	1,033 〈50.5%〉	1,014 〈49.5%〉	2,047 〈100.0%〉
百引	1,179 〈50.5%〉	1,155 〈49.5%〉	2,334 〈100.0%〉
種子島	〈☆ %〉	〈☆ %〉	〈☆18,000余〉 〈100.0%〉
屋久島	3,318 〈49.7%〉	3,364 〈50.3%〉	6,682 〈100.0%〉

(参考) 種子島・末吉を除外した合計人口

種子島・末吉を除く大隅国人口	男子数	女子数	合計
	100,174 (52.4%)	90,942 (47.6%)	191,334 ※ 実際の集計値は 191,116 (100.0%)

☆当時、日向国所属の末吉郷の人口

郷名	男子数	女子数	合計
末吉	4,392 〈51.1%〉	4,195 〈48.9%〉	8,587 〈100.0%〉

[ 出典：『薩隅日地理纂考』(明治4年正月15日、鹿児島県教育会編) ]

- 注1. 本表は、近世中期以降幕末期までの大隅国所属の郷を抽出して作成してある。  
 2. 太字の数値は史料原文掲載の合計数値を示し、実際の集計値とは内訳として併記されている男・女各人口の実際の合計数値である。  
 3. 人口比率は各郷ごとに対比実際集計値で示してある。  
 4. 記載が欠落している種子島の項の総人口(☆)については、西村天因の『南島偉功伝』に収める慶応4年=明治元年(1868)段階の数値を参考までに掲げた。  
 5. 表末の合計数値には上記注4の種子島及び当時日向国所属の末吉の分は含めていない。  
 6. 安政元年頃改定の『要用集』及び上記『南島偉功伝』には種子島の人口について次のような数値を掲げる。

(1) 『要用集』に掲げる種子島人口

嘉永5年(1852)の種子島人口 13,932人(100.0%)  
 〈内訳〉

A. 男子人口判明分

①家来男	2,450人	計5,485人(39.4%)
②出家男	39人	
③百姓男	1,966人	
④塩屋男	319人	
⑤浦人男	668人	
⑥野町人男	43人	

B. 女子人口

⑦家来女	2,153人	計4,268人(30.6%)
⑧百姓女	1,395人	
⑨百姓女	212人	
⑩浦人女	482人	
⑪野町人女	26人	

C. 男女人口内訳不明分

⑫家中足軽以下 末々男女	4,113人	計4,179人(30.0%)
⑬公義流人男女	66人	

☆明治初期の大隅国推計人口(含、種子島・末吉)

(2)幕末期以降の種子島人口(『南島偉功伝』)	大隅国総人口	21万後半~22万人台か(100.0%)
文化元年(1804)	14,209人	
慶応4年=明治元年(1868)	18,000人余	
明治15年(1882)	20,117人	(内訳) 男子 11万人台半ばか (約52%弱)
明治30年(1897)	24,226人	女子 10万人台前半か (約48%強)

7. 嘉永5年~明治30年に至る約45年間の種子島人口の増加分(10,294人)は嘉永期の約74%の増加、年率1.6%の増加率である。ほぼ同じ増加率で明治初期にも種子島人口が増えていったと仮定した場合、明治4年段階の種子島人口として18,700人前後の数量が得られる。また嘉永期の性別不明の人口率30%分(4,179人)を仮に男女均等に配分した場合、同期の種子島の男女比率として男子54.4%・女子45.6%の数値が得られる。この男女比率で明治4年段階の種子島人口が存在していたと仮定して算出した場合、当該期の男子人口として約10,200人・女子人口として約8,500人の数量が得られる。これらをベースに藩政最末期(明治4年頃)の大隅国総人口及び男女別内訳人口を旧属末吉郷(当時、一時期日向国編入)の分まで含めて推定すると、おおよそ上表最下段にしめしたような推定人口を得ることができる。

### 3. 日向国諸県郡

郷名	男子数 〈比率〉	女子数 〈比率〉	合計 〈比率〉	郷名	男子数 〈比率〉	女子数 〈比率〉	合計 〈比率〉
綾	710 〈55.6%〉	566 〈44.4%〉	1,276 〈100.0%〉	真幸 ※旧吉田・ 馬関田郷よ りなる	867 〈52.6%〉	780 〈47.4%〉	1,647 〈100.0%〉
小林	2,622 〈51.7%〉	2,453 〈48.3%〉	5,075 〈100.0%〉	加久藤	1,072 〈52.2%〉	983 〈47.8%〉	2,055 〈100.0%〉
高岡	3,187 〈52.8%〉	2,852 〈47.2%〉	6,039 〈100.0%〉	飯野	1,095 〈50.3%〉	1,083 〈49.7%〉	2,078 ※実際の集計値は 2,178 (100.0%)
穆佐	989 〈52.9%〉	881 〈47.1%〉	1,807 ※実際の集計値は 1,870 (100.0%)	須木	572 〈51.2%〉	546 〈48.8%〉	1,118 〈100.0%〉
倉岡	551 〈51.4%〉	520 〈48.6%〉	1,071 〈100.0%〉	野尻	1,250 〈55.4%〉	1,006 〈44.6%〉	2,256 〈100.0%〉
上三股 ※旧高城郷 なり	1,469 〈52.5%〉	1,331 〈47.5%〉	2,800 〈100.0%〉	高原 ※旧高崎郷 を編入せり	2,563 〈53.3%〉	2,248 〈46.7%〉	4,811 〈100.0%〉
山之口	989 〈52.9%〉	881 〈47.1%〉	1,870 〈100.0%〉	志布志	3,524 〈52.6%〉	3,171 〈47.4%〉	6,695 〈100.0%〉
下三股 ※旧勝岡郷 に郡城梶山 村が入る	3,196 〈51.4%〉	3,025 〈48.5%〉	6,221 〈100.0%〉	松山	997 〈52.3%〉	908 〈47.7%〉	1,905 〈100.0%〉
都城	6,600 〈51.1%〉	6,320 〈48.9%〉	12,919 ※実際の集計値は 12,920 (100.0%)	大崎	3,035 〈54.1%〉	2,571 〈45.9%〉	5,606 〈100.0%〉
荘内 ※旧都城の 一部を割き 設置	6,029 〈51.6%〉	5,645 〈48.4%〉	11,674 〈100.0%〉	合計	41,317 〈52.2%〉	37,770 〈47.8%〉	79,087 ※実際の集計値は 79,087 (100.0%)

[ 出典：『薩隅日地理纂考』（明治4年正月15日、鹿児島県教育会編） ]

- 注1. 本表は、近世中期以降幕末期までの日向国諸県郡所属の郷を抽出して作成してある。
2. 太字の数値は史料原文掲載の合計数値を示し、実際の集計値とは内訳として併記されている男・女各人口の実際の合計数値である。
3. 人口比率は各郷ごとに対比実際集計値で示してある。
4. 明治4年段階の日向国諸県郡には旧属大隅国の末吉郷が編入されていたが、前代のデータとの比較や利用の便益上、末吉郷の人口は日向国から抜いて大隅国の箇所に移して掲げ、人口集計値も大隅国人口に加えて示してある。

#### ☆明治初期の日向国諸県郡人口（実集計値） ※志布志・松山・大崎を含む、末吉は除く

日向国総人口 79,087人 (100.0%)

(内訳) 男子 41,317人 (52%強)  
平民 37,770人 (41%弱)

第7表 薩摩藩の郷別・身分別人口 明治4年(1871)頃

1. 薩摩国

郷名	士卒数 <比率>	平民数 <比率>	合計 <比率>	郷名	士卒数 <比率>	平民数 <比率>	合計 <比率>
鹿兒島	士 26,992 <31.6%> 卒 2,571 ※実際の集計値は 2,567(3.0%)	55,872 <65.4%>	85,435 ※実際の集計値は 85,431 (100.0%)	甌島	士 4,011 ※実際の集計値は 3,966 (26.2%)	11,161 <73.8%>	15,172 ※実際の集計値は 15,127 (100.0%)
吉田	士 1,192 <31.1%> 卒 292 <7.6%>	2,353 <61.3%>	3,837 <100.0%>	宮之城	士 2,476 <28.7%> 卒 1,082 <12.6%>	5,050 <58.7%>	8,608 <100.0%>
郡山	士 1,600 ※実際の集計値は 1,333(29.4%) 卒 186 <4.1%>	3,008 <66.5%>	4,535 ※実際の集計値は 4,527 (100.0%)	黒木	士 545 <59.5%> 卒 37 <4.0%>	335 <36.5%>	917 <100.0%>
伊集院	士 3,159 <17.4%> 卒 1,078 (6.0%)	13,901 <76.6%>	18,138 <100.0%>	山崎	士 623 <15.7%>	3,342 <84.3%>	3,965 <100.0%>
永吉	士 1,985 <47.0%> 卒 385 <9.1%>	1,857 <43.9%>	4,227 <100.0%>	大村	士 1,118 <33.5%> 卒 91 ※実際の集計値は 95(2.9%)	2,122 <63.6%>	3,331 ※実際の集計値は 3,335 (100.0%)
吉利	士 905 <29.5%> 卒 411 <13.4%>	1,751 <57.1%>	3,067 <100.0%>	蘭牟田	士 1,096 ※実際の集計値は 1,106(72.0%) 卒 58 <3.8%>	373 <24.2%>	1,526 ※実際の集計値は 1,537 (100.0%)
串木野	士 1,593 <10.0%> 卒 20 <0.1%>	14,293 <89.9%>	15,906	牛山 ※旧大口・山 野・羽月郷よ りなる	士 2,922 ※実際の集計値は 2,918(32.9%) 卒 17 <0.2%>	5,941 <66.9%>	8,880 ※実際の集計値は 8,876 (100.0%)
日置	士 1,291 <19.2%> 卒 446 <6.6%>	4,982 <74.2%>	6,719 <100.0%>	鶴田	士 1,167 <35.5%> 卒 9 <0.3%>	2,113 <64.2%>	3,289 <100.0%>
市来	士 3,216 <19.6%> 卒 483 ※実際の集計値は 513(3.1%)	12,722 <77.3%>	16,421 ※実際の集計値は 16,451 (100.0%)	佐志	士 384 <32.0%> 卒 25 <2.1%>	789 <65.9%>	1,198 <100.0%>
入来	士 2,699 <59.4%> 卒 242 <5.3%>	1,603 <35.3%>	4,514 ※実際の集計値は 4,544 (100.0%)	出水	士 5,806 <31.2%> 卒 30 <0.2%>	12,755 <68.6%>	18,591 <100.0%>
樋脇	士 2,033 <40.6%> 卒 36 <0.7%>	2,943 <58.7%>	5,012 <100.0%>	長島	士 2,270 <31.7%>	4,889 <68.3%>	7,159 <100.0%>
永利	士 1,232 <56.7%>	950 ※実際の集計値は 941 (43.3%)	2,182 ※実際の集計値は 2,173 (100.0%)	高尾野	士 1,869 <46.8%>	2,124 <53.2%>	3,993 <100.0%>
平佐 ※樋脇郷の 中・楠元・倉 野村が入る	士 1,890 <45.5%> 卒 57 <1.4%>	2,203 <53.1%>	4,150 <100.0%>	野田	士 729 <35.1%>	1,346 <64.9%>	2,075 <100.0%>
隈之城	士 2,018 <32.9%> 卒 75 <1.2%>	4,049 <65.9%>	6,142 <100.0%>	阿久根	士 1,268 <11.6%> 卒 54 <0.5%>	9,496 <87.0%>	10,910 ※実際の集計値は 10,818 (100.0%)
高江	士 1,061 <40.6%> 卒 491 <18.8%>	1,622 ※実際の集計値は 1,062 (40.6%)	2,614 <100.0%>	水引	士 1,659 <21.0%> 卒 253 <3.0%>	6,399 ※実際の集計値は 6,395 <77.0%>	8,307 <100.0%>
東郷	(☆2,623) <34.5%>	(☆4,972) <65.5%>	(☆7,595) <100.0%>	高城	士 4,267 <49.6%> 卒 56 <0.6%>	4,282 <49.8%>	8,605 <100.0%>

郷名	士卒数 〈比率〉	平民数 〈比率〉	合計 〈比率〉
川 辺	士 1,941 〈17.0%〉 卒 109 〈0.9%〉	9,397 〈82.1%〉	11,447
勝 目 ※旧山田郷 なり	士 1,234 〈37.0%〉	2,099 〈63.0%〉	3,333 〈100.0%〉
加世田	士 5,783 〈18.3%〉 卒 31 〈0.1%〉	25,781 〈81.6%〉	31,595 〈100.0%〉
南 方 ※旧鹿籠・坊泊・久志・秋目を合す	士 4,952 〈40.7%〉	7,203 〈59.3%〉	12,155 〈100.0%〉
穎 娃	士 2,139 ※実際の集計値は 2,109 (13.5%)	13,537 〈86.5%〉	15,676 ※実際の集計値は 15,646 (100.0%)
阿 多	士 1,391 〈24.2%〉 卒 55 〈1.0%〉	4,296 〈74.8%〉	5,747 ※実際の集計値は 5,742 (100.0%)
田布施	士 1,662 〈22.3%〉 卒 484 〈6.6%〉	5,286 〈71.1%〉	7,432 〈100.0%〉
伊 作	士 2,772 ※実際の集計値は 2,778 (23.1%) 卒 257 〈2.1%〉	8,996 〈74.8%〉	12,025 ※実際の集計値は 12,031 (100.0%)
喜 入	士 1,719 〈20.8%〉 卒 262 〈3.2%〉	6,295 〈76.0%〉	8,276 〈100.0%〉

郷名	士卒数 〈比率〉	平民数 〈比率〉	合計 〈比率〉
知 覧	士 4,542 〈34.2%〉 卒 146 〈1.1%〉	8,590 〈64.7%〉	13,278
指 宿	士 1,074 〈9.3%〉	10,514 〈90.7%〉	11,588 〈100.0%〉
山 川	士 347 〈5.5%〉	5,942 〈94.5%〉	6,289 〈100.0%〉
今和泉	士 906 〈16.0%〉 卒 167 〈2.9%〉	4,612 〈81.1%〉	5,685 〈100.0%〉
谷 山	士 3,422 〈16.2%〉 卒 1,301 〈0.9%〉	16,364 〈77.6%〉	21,087 〈100.0%〉
三 島	士・卒 0 〈0%〉	623 〈100.0%〉	623 〈100.0%〉
硫黄島	0	253	253
黒島	0	288	288
竹島	0	82	82
七 島	士・卒 0 〈0%〉	767 〈100.0%〉	767 〈100.0%〉
口之島	0	105	105
中臥之島	0	105	105
平蛇島	0	68	68
諏訪之瀬島	0	72	72
悪石島	0	0	0
宝島	0	118	118
		299	299

[ 出典：『薩隅日地理纂考』（明治4年正月15日、鹿児島県教育会編） ]

- 注1. 本表は、近世中期以降の薩摩国所属の郷を抽出して作成してある。
2. 太字の数値は史料原文掲載の合計数値を示し、実際の集計値とは内訳として併記されている男・女各人口の実際の合計数値である。
3. 人口比率は各郷ごとに対比集計値で示してある。
4. 記載が欠落している東郷の人口については、参考までに明治10年代前半(1881年頃)のデータを収める『鹿児島県地誌』の数値を掲げた。
5. 表末参考の合計値は上記注3の東郷分の数値は含めていない。
6. 上記『鹿児島県地誌』に掲げる人口は次のとおりである。

明治10年代前半(1881年頃)の東郷総人口  
〈内訳〉 7,595人(100.0%)

A. 士族人口

- ①士族男 1,324人 計2,623人(34.5%)  
②士族女 1,297人

B. 平民人口

- ③平民男 2,498人 計4,972人(65.5%)  
④平民女 2,474人

7. 嘉永5年の『要集』と明治4年の『薩隅日地理纂考』に掲げる薩摩藩の人口数値に基づく、この20年間に薩摩国ではおよそ18%前後の人口増加があったことが推定される。その後の10年間にこれとほぼ同じ増加率で東郷人口が増えたと仮定して明治4年段階の人口を算出すると約7,000人の数量が得られる。また当該期の東郷の士族と平民人口が明治10年代前半とほぼ同じ比率で存在していたと仮定してそれぞれの人口を算出すると、前者については2,400人余、後者については約4,600人の数量が得られる。これらの数量をベースにして藩政末期(明治4年頃)の薩摩国の総人口及びその男女の内訳人口を推定すると、およそ上表下段に示したような推定人口を得ることができる。

(参考) 東郷を除外した合計人口

東郷を除く薩摩国人口	士卒数	平民数	合計
	士 130,287 ※実際の集計値は 129,957 (28.5%) (内訳) 士族 118,960 ※実際の集計値は 118,630 (26.0%) 卒族 11,327 (2.5%)	326,926 ※実際の集計値は 326,355 (71.5%)	457,213 ※実際の集計値は 456,312 (100.0%)

☆明治初期の薩摩国推計人口(含、東郷)

薩摩国総人口	46万3千~4千人位か	(100.0%)
(内訳)士・卒等	13万2千~3千人位か	(29%強)
平民	33万1千人前後か	(71%弱)

## 2. 大隅国

郷名	士卒数 〈比率〉	平民数 〈比率〉	合計 〈比率〉	郷名	士族数 〈比率〉	平民数 〈比率〉	合計 〈比率〉
帖佐	士 1,815 〈34.3%〉 卒 99 〈1.9%〉	3,373 〈63.8%〉	5,487 ※実際の集計値は 5,287 (100.0%)	横川	士 1,354 ※実際の集計値は 1,334 (35.7%) 卒 14 〈1.9%〉	2,425 ※実際の集計値は 2,385 (63.9%)	3,793 ※実際の集計値は 3,733 (100.0%)
重富	士 1,404 〈37.8%〉 卒 195 〈5.2%〉	2,118 〈57.0%〉	3,717 〈100.0%〉	栗野	士 949 〈23.7%〉 卒 30 〈1.9%〉	3,028 〈75.6%〉	4,007 〈100.0%〉
蒲生	士 3,396 〈57.7%〉 卒 70 〈1.2%〉	2,420 〈41.1%〉	5,886 〈100.0%〉	吉松	士 962 〈40.9%〉	1,390 ※実際の集計値は 1,430 (59.1%)	2,352 ※実際の集計値は 2,392 (100.0%)
山田	士 1,231 〈38.0%〉 卒 79 〈2.4%〉	1,933 〈59.6%〉	3,243 〈100.0%〉	太良	士 1,948 〈39.7%〉 卒 27 〈0.6%〉	2,925 〈59.7%〉	4,900 〈100.0%〉
溝辺	士 1,126 〈34.7%〉 卒 138 〈4.2%〉	1,984 〈61.1%〉	3,248 〈100.0%〉	菱刈	士 1,150 〈41.3%〉 卒 120 〈4.3%〉	1,517 〈54.4%〉	2,787 〈100.0%〉
加治木	士 3,686 〈39.3%〉 卒 375 〈4.0%〉	5,325 〈56.7%〉	9,386 〈100.0%〉	桜島	士 2,772 〈24.2%〉 卒 31 〈0.3%〉	8,626 〈75.5%〉	11,429 〈100.0%〉
襲山 ※旧日当山・ 曾於郡郷よ りなる	士 2,843 〈45.6%〉 卒 39 〈0.6%〉 旧神官 159 〈2.6%〉	3,194 〈51.2%〉	6,195 ※実際の集計値は 6,235 (100.0%)	牛根	士 828 〈19.2%〉 卒 5 〈0.1%〉	3,495 ※実際の集計値は 3,482 (80.7%)	4,328 ※実際の集計値は 4,315 (100.0%)
清水	士 2,006 〈52.2%〉 卒 18 〈0.5%〉	1,815 〈47.3%〉	3,839 〈100.0%〉	垂水	士 3,005 〈26.5%〉 卒 754 〈6.6%〉	7,581 〈66.9%〉	11,340 〈100.0%〉
敷根	士 926 〈39.7%〉 卒 2 〈0.1%〉 旧神官 8 〈0.3%〉	1,397 〈59.9%〉	2,333 〈100.0%〉	新城	士 625 〈35.5%〉 卒 57 〈3.2%〉	1,082 〈61.3%〉	1,764 〈100.0%〉
福山	士 1,363 〈27.8%〉 卒 3 〈0.1%〉 旧神官 95 〈1.9%〉	3,442 〈70.2%〉	4,903 〈100.0%〉	小根占	士 839 〈16.6%〉 旧神官 8 〈0.1%〉	4,222 〈83.3%〉	5,069 〈100.0%〉
財部	士 2,010 〈34.6%〉 旧神官 90 〈1.6%〉	3,705 〈63.8%〉	5,805 〈100.0%〉	大根占	士 543 〈15.0%〉	3,071 〈85.0%〉	3,612 ※実際の集計値は 3,614 (100.0%)
恒吉	士 705 〈26.3%〉 旧神官 31 〈1.1%〉	1,948 〈72.6%〉	2,684 〈100.0%〉	田代	士 437 〈26.2%〉	1,228 〈73.8%〉	1,665 〈100.0%〉
市成	士 935 〈46.6%〉 卒 106 〈5.3%〉	966 〈48.1%〉	2,007 〈100.0%〉	佐多	士 516 〈11.7%〉	3,907 〈88.3%〉	4,423 〈100.0%〉
岩川 ※末吉の五 十町・中之 内村を割く	士 1,668 〈42.3%〉 卒 154 〈3.9%〉	2,120 〈53.8%〉	3,942 〈100.0%〉	内之浦	士 586 〈20.1%〉 卒 1 旧神官 2 〈0.1%〉	2,320 〈79.8%〉	2,909 〈100.0%〉
国分	士 4,538 〈26.5%〉 卒 129 〈0.7%〉 旧神官 28 〈0.2%〉	12,441 〈72.6%〉	17,144 ※実際の集計値は 17,136 (100.0%)	高山	士 1,409 〈21.0%〉 卒 43 旧神官 95 〈1.4%〉	5,150 〈76.9%〉	6,697 〈100.0%〉
踊	士 1,532 〈40.0%〉 旧神官 53 〈1.4%〉	2,242 〈58.6%〉	3,826 ※実際の集計値は 3,827 (100.0%)	串良	士 1,406 〈16.4%〉 卒 37 〈0.4%〉	7,148 〈83.2%〉	8,591 〈100.0%〉



郷名	士卒数 〈比率〉	平民数 〈比率〉	合計 〈比率〉
鹿屋	士 825 〈12.4%〉 卒 2 旧神官 17 〈0.3%〉	5,788 〈87.3%〉	6,635 ※実際の集計値は 6,632 (100.0%)
始羅	士 497 〈16.1%〉 卒 3 旧神官 26 〈0.8%〉	2,569 〈83.0%〉	3,095 〈100.0%〉
大始良	士 1,001 〈22.9%〉 卒 8 〈0.2%〉	3,366 〈76.9%〉	4,385 ※実際の集計値は 4,375 (100.0%)
花岡	士 624 〈22.0%〉 卒 111 〈3.9%〉	2,103 〈74.1%〉	2,845 ※実際の集計値は 2,838 (100.0%)

郷名	士卒数 〈比率〉	平民数 〈比率〉	合計 〈比率〉
高隈	士 358 〈17.5%〉 旧神官 7 〈0.3%〉	1,682 〈82.2%〉	2,047 〈100.0%〉
百引	士 578 〈24.8%〉 卒 6 旧神官 8 〈0.3%〉	1,742 〈74.6%〉	2,334 〈100.0%〉
種子島	士 〈☆〉 卒 〈☆〉 旧神官 〈☆〉	〈☆〉	〈☆18,000余〉 〈100.0%〉
屋久島	士・卒 0 〈0.0%〉	6,682 〈100.0%〉	6,682 〈100.0%〉

- 注1. 本表は、近世中期以降幕末期までの大隅国所  
属の郷を抽出して作成してある。  
2. 太字の数値は史料原文掲載の合計数値を示し、  
実際の集計値とは内訳として併記されている  
男・女各人口の実際の合計数値である。  
3. 人口比率は各郷ごとに対比実際集計値で示し  
てある。  
4. 記載が欠落している種子島の項の総人口(☆)  
については、西村天因の『南島偉功伝』に収  
める慶応4年=明治元年(1868)段階の数値  
を参考までに掲げた。  
5. 表末の合計数値には上記注4の種子島分は含  
めていない。  
6. 安政元年頃改定の『要用集』及び上記『南島  
偉功伝』には種子島の人口について次のよう  
な数値を掲げる。

[ 出典：『薩隅日地理纂考』(明治4年  
正月15日、鹿児島県教育会編) ]

(参考) 種子島・末吉を除外した合計人口

種子島・末吉を除く大隅国人口	士族など数	平民数	合計
	57,679 ※実際の集計値は 57,659 (30.2%) (内訳) 士族 54,376 (28.5%) 卒族 2,656 (1.4%) 旧神官 627 (0.3%)	133,470 ※実際の集計値は 133,457 (69.8%)	191,334 ※実際の集計値は 191,116 (100.0%)

(1) 『要用集』に掲げる種子島人口

嘉永5年(1852)の種子島人口 13,932人(100.0%)  
〈内訳〉

A. 士身分人口判明分

①家来男 2,450人  
②家来女 2,153人  
③出家男 39人  
計 4,642人(33.3%)

B. 被支配の平民身分人口判明分(含む、家中足軽)

④百姓男 1,966人  
⑧百姓女 1,395人  
⑨塩屋男 319人  
⑩塩屋女 212人  
⑨浦人男 668人  
⑨浦人女 482人  
⑨野町人男 43人  
⑨野町人女 26人  
⑫家中足軽以下 4,113人  
末々男女  
⑬公義流人男女 66人  
計 9,290人(66.7%)

☆当時、日向国所属の末吉郷の人口

郷名	士卒数	平民数	合計
末吉	士 2,090 〈24.3%〉 卒 20 〈0.2%〉	6,477 〈75.4%〉	8,587 〈100.0%〉

☆明治初期の大隅国推計人口(含、種子島・末吉)

大隅国総人口	21万後半~22万人台か(100.0%)
(内訳) 士・卒等	6万6千人前後か(約30%)
平民	15万3千人前後か(約70%)

7. 嘉永5年~明治30に至る約45年間の種子島人口の増加分(10,297人)は嘉永期の約74%の増加、年率1.6%の増加率である。ほぼ同じ増加率で明治初期にも種子島人口が増えていったと仮定した場合、明治4年段階の種子島人口として18,700人前後の数量が得られる。また当該期の種子島の士身分及び被支配庶民人口が嘉永5年段階とほぼ同じ比率でそれぞれ存在していたと仮定して算出すると、前者について約6,200人、後者について約12,500人の数量が得られる。これらをベースにして藩政最末期(明治4年頃)の大隅国総人口及び族籍別人口内訳を旧属末吉郷(当時、一時期日向国編入)の分まで含めて推定すると、おおよそ上表下段に示したような推定人口を得ることができる。

### 3. 日向国諸県郡

郷名	男子数 〈比率〉	女子数 〈比率〉	合計 〈比率〉
綾	士 878 〈68.8%〉	398 〈31.2%〉	1,276 〈100.0%〉
小林	士 2,272 〈44.8%〉	2,803 〈55.2%〉	5,075 〈100.0%〉
高岡	士 2,016 〈33.4%〉	4,023 〈66.6%〉	6,039 〈100.0%〉
穆佐	士 637 〈34.1%〉	1,233 〈65.9%〉	1,870 ※実際の集計値は 1,870 (100.0%)
倉岡	士 311 〈29.0%〉	760 〈71.0%〉	1,071 〈100.0%〉
上三股 ※旧高城郷 なり	士 1,093 〈39.0%〉	1,707 〈61.0%〉	2,800 〈100.0%〉
山之口	士 587 〈31.4%〉	1,283 〈68.6%〉	1,870 〈100.0%〉
下三股 ※旧勝岡郷 に都城梶山 村が入る	士 3,168 〈50.9%〉	3,053 〈49.1%〉	6,221 〈100.0%〉
都城	士 5,386 〈41.7%〉 卒 238 〈1.8%〉	7,295 ※実際の集計値は 7,296 〈56.5%〉	12,919 ※実際の集計値は 12,920 〈100.0%〉
荘内 ※旧都城の 一部を割き 設置	士 5,307 〈45.5%〉	6,367 〈54.5%〉	11,674 〈100.0%〉
真幸 ※旧吉田・ 馬関田郷よ りなる	士 979 〈59.4%〉	668 〈40.6%〉	1,647 〈100.0%〉

郷名	男子数 〈比率〉	女子数 〈比率〉	合計 〈比率〉
加久藤	士 712 〈34.6%〉	1,343 〈65.4%〉	2,055 〈100.0%〉
飯野	士 1,028 ※実際の集計値は 1,128 (51.8%)	1,050 〈48.2%〉	2,078 ※実際の集計値は 2,178 (100.0%)
須木	士 912 〈81.6%〉	206 〈18.4%〉	1,118 〈100.0%〉
野尻	士 1,011 〈44.8%〉	1,245 〈55.2%〉	2,256 ※実際の集計値は 2,256 (100.0%)
高原 ※旧高崎郷 を編入せり	士 2,313 〈48.1%〉	2,498 〈52.9%〉	4,811 〈100.0%〉
志布志	士 1,643 〈24.5%〉	5,052 〈75.5%〉	6,695 〈100.0%〉
松山	士 578 〈30.3%〉	1,327 〈69.7%〉	1,905 〈100.0%〉
大崎	士 1,775 〈31.7%〉	3,831 〈68.3%〉	5,606 〈100.0%〉
合計	32,844 ※実際の集計値は 32,944 (41.7%) (内訳) 士族 32,606 ※実際の集計値は 32,706 (41.4%) 卒族 238 (0.3%)	46,142 ※実際の集計値は 46,143 (58.3%)	78,986 ※実際の集計値は 79,087 (100.0%)

〔出典：『薩隅日地理纂考』（明治4年正月15日、鹿児島県教育会編）〕

- 注1. 本表は、近世中期以降幕末期までの日向国諸県郡所属の郷を抽出して作成してある。
2. 太字の数値は史料原文掲載の合計数値を示し、実際の集計値とは内訳として併記されている男・女各人口の実際の合計数値である。
3. 人口比率は各郷ごとに対比集計値で示してある。
4. 明治4年段階の日向国諸県郡には旧属大隅国の末吉郷が編入されていたが、前代のデータの比較や利用の便宜上、末吉郷の人口は日向国から抜いて大隅国の箇所に移して掲げ、人口集計値も大隅国人口に加えて示してある。

#### ☆明治初期の日向国諸県郡人口（実集計値）

※志布志・松山・大崎を含む、末吉は除く

日向国総人口	79,087人	(100.0%)
(内訳) 士・卒	32,944人	(42%弱)
平民	46,143人	(58%強)